漂流者の艦隊運営

アイノ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら無人島にいた１人の男の、必死な鎮守府運営。
右も左もわからない記憶喪失な彼は、この現状を打破できるのか？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

・本小説は、間が空いてしまった「提督は今日も必死に操を守る」を書くためのリハビリ的な小説です。
・現在は並行して投稿していますが、設定や内容には一切繋がりはありません。

目次

プロローグ
第０１話　目覚めと２人の少女 ―― 1
回想編
第０２話　ここはどこ？私は誰？ ―― 6
第０３話　初期艦との出会い ―― 13
第０４話　新たな同居人、そして…… ―― 20
第０５話　決意 ―― 29
第０６話　続々と増える仲間たち ―― 37
現在編
第０７話　現在の日常 ―― 50
第０８話　珍客 ―― 60
第０９話　新たな風 ―― 71
番外編０１　北方棲姫の１日 ―― 82
第１０話　過去 ―― 96
第１１話　空母の本業 ―― 106

プロローグ

第01話　目覚めと2人の少女

「ん、んんっ……」

深い眠りの底にいた私の瞼を突き刺すのは、カーテンの隙間から差し込む朝日だった。

「……もう朝か」

差し込む光を浴び、徐々に覚醒してくる意識。

この時期に再び意識を手放そうものなら、次に目が覚めるのは何時になるか分からない為、すこぶる温かい布団の上で体を起こす。

……いやまて、幾ら何でも温かすぎないか？

現在、季節は秋真っ只中。

自身は寒さに強いと自負しているとはいえ、ここ最近の冷え込みはちょっと耐え難く、数日前に掛布団を追加こそしたがそれにしても温かい。

まぁ心当たりはあるんだが……と頭の中で呟きながら勢いよく布団を捲ると、そこには予想通りの２人が私の体を挟むようにして眠っていた。

「やはり嵐と萩風か。昨晩は雨風も強かったし、雷も鳴ってたし仕方ないか」

そう呟きながら、未だ眠ったままの２人の頭を撫でる。

うちの艦隊には他にも夜や雷が苦手な子もいるが、とりわけこの２人の夜嫌いは顕著である。

これは２人が実際に艦だった時、ベラ湾で共に夜に沈んでいることに由来するようだ。

そう、私の目の前でまだあどけなさの残る顔で寝ている２人は、純粋な人間ではない。それどころか、この建物―鎮守府―にいる純粋な人間は私のみだ。

彼女たちは「艦娘」と呼ばれる存在で、見た目こそ少女のようだが、人類共通の敵「深海棲艦」を撃退することができる唯一の存在……らしい。

何故、所々言葉を濁したのかは後に語るとして、とりあえず2人を起こすことにする。
手近な所に時計が無いが、太陽もだいぶ高くなっているようだし、そろそろいい時間だろう。
頭を撫でていた手で肩を軽く叩き、彼女達の覚醒を促す。

「嵐、萩風、もう朝だぞ」
「む……んん……まぶし」
「ふぁ……司令、おはようございまふ……」
「おはよう2人とも。とりあえず顔を洗って来たらどうかな?」
「うーい……」
「ふぁい～……」

放っておくとまた布団の中に戻りそうだったので、とりあえず洗顔を促す。
2人が洗面所に入ったのを見届けると、3つのカップを取り出してコーヒーの準備をする。
はて、砂糖は嵐が2個で萩風が1個でよかっただろうか。
私自身は無糖派の為、いざとなれば交換すれば良いと思い、準備を進めていく。

そうこうしているうちに、２人が洗面所から戻ってきた。
さすが女の子、短時間で寝癖までキッチリと直っている。

「ほれ、眠気覚ましのコーヒーだ。嵐が2個、萩風が1個でいいか？」
「おっ、さすが司令！砂糖の数まで完璧だ！」
「すいません、司令に準備させてしまって……」
「気にしないでくれ。どうせ自分も飲むんだし」

そう言いつつカップに口をつける。
香ばしい香りが鼻を抜けていき、カップを傾ければ口の中に爽やかな苦みが広がる。
甘いコーヒーも嫌いではないが、やはりこの苦みがないと物足りない。

「はふぅ……美味しいです」
「できれば俺はミルク入りが良かったけどなぁ～」
「もう、我がまま言わないの！砂糖が入ったコーヒーが飲めるだけでも運がいいのに……」
「確かになぁ……このコーヒーだって、いつまで飲めるか分からないし」

「……そうだな」

２人の会話に頷く私の顔は、恐らく仏頂面だっただろう。

一応断っておくと、生来人との接し方が下手な私ではあるが、流石に常時仏頂面というわけではない。

そんな表情にならざるを得ない事情があるのだ。

それはひとえに今の環境――私の記憶が無い事と、今いるこの場所がどこかの小島の忘れ去られた鎮守府であることに起因する。

ふと、どうしてこんな環境になったのかを思い返してみる。

目覚めの記憶と、彼女達との出会いを……

回想編
第０２話　ここはどこ?私は誰?

ざざーん、ざざーん……

目の前の砂浜で、波が寄せては返すを繰り返している。

顔を上げ、周囲の見慣れない風景をを見回しながら、私は途方に暮れていた。

それもそのはず。今より前の記憶がすっぽりと抜け落ちている上、気が付けば自分は砂浜に立っており、周りを見渡せば南国の島を彷彿とさせるような風景になっていた。

もちろん古典的な頬つねりも試してみたが、結果として得られたものは赤くなった頬とジンジンとした痛みだけだった。

「なんでか分からんが、ついに夢の中でも痛みを感じられるようになったか……」

そういう事であってくれと願いを込めた呟きは、しかし、痛み以外の五感に訴えかけてくる情報がそれを否定する。

燦々と照らす太陽、潮の香りを運んでくる風、太陽に焼かれて痛いほど熱された砂浜など。

これが疑似的なものだとすると、今日巷で騒がれているＶＲ……だったか、そんな感じのものなど紙芝居同然と言っていいほどリアルだった。

「ＶＲとか、そういうどうでもいい単語は覚えてるのか……」

そうなると、自分がどこまで覚えており、更にはどういう理由でここに立っているのかがまるで分からない。

とりあえず、情報の整理という名の記憶への旅へ身を投じる。

◇

自身の名は「長谷川　大樹（はせがわ　だいき）」

実家は、頭にドが３つくらい付きそうな田舎で、高校卒業まではそこで暮らしてた。

とりあえずここまでは覚えている。

大学進学と同時に上京し、ほどほどの成績を残して卒業。

その後ほどほどの会社に入社した……筈なのだが、この辺りから記憶が曖昧になっている。
そして最近の記憶が全くと言っていいほど無い。
これでは、ここへ来た方法や理由どころか帰るべき場所すら分からない……どうしたものか。

改めて周囲を見渡すも、船やヘリどころか建物１つ無い。
いや、よく見ると少し離れたところに１つだけ建物があったが、遠くから見る限りだと元々何の為の施設か分からない。
まあとりあえず、雨風が凌げる場所が見つかっただけマシだと思う事にする。

「あとは水と食料の確保か……あと、そもそもこの島自体はどの位の大きさなんだ?」

まだ無人島と決まったわけでは無いし、とりあえず日が高いうちに確認できることを探そう。
人が居れば、もしかすると私の事を知っている人が居るかもしれない。
心の奥でそう祈りつつ、探索を開始するのであった。

◇

「はぁ……疲れた」

日がだいぶ傾いた頃、日中に見かけた建物の前まで戻ってきた彼はため息をつく。
手には数種類の木の実や果物、そして水が入っている２Ｌのペットボトルを持っていた。

探索して分かったことは、残念ながらここは無人島であり、大きさは東京ドーム……がどの位の大きさか分からないが、多分１～２個分くらいの小さな島だということだ。
四方は完全に海に囲まれ、遠くを見ても他の島や船は確認できなかった。
正に自然の牢獄と言っても過言ではない。

ただ、そう悪い話ばかりではなかった。
まずここは自然が豊かで、島の中央部分は多種多様な植物が生い茂る森になっている。

田舎育ちの彼にとっては自然の食物庫と言わんばかりに、食せる木の実や野草、果物だらけだった。
ただ、未だ火を起こせる準備が無いため、そのまま食せる木の実や果物だけ採取してきたわけだ。
また、森の中に湧き水が流れる場所があり、飲み水の確保もできた。
恐らくどこかから漂着したであろうペットボトルを道すがら拾っていたので、そこに水を汲んで持ち帰ってきた。
漂着物があったという事は、案外すぐそばを船が通る可能性もあることに気付き、少しだけ気分が上向いたのは言うまでもない。

とは言え未だ完全サバイバル状態な訳だが、いつまでも木の実ばかり食べている訳にはいかない。
とりあえず魚などを取る方法を考えたり、あとは近くをヘリや飛行機、船が通った時に漂流者がいる事を伝えられる術を考えなくては。
やるべき事は多々あれど、もう少しで日も暮れるので最後は寝床の確認を行おうと、日中に見かけた謎の建物に来たのだ。

建物は予想以上に大きく、部屋数も多かった。
中も当初の予想に反して、荒れ放題という程ではなかった。
もちろん埃はかなり積もってるし、放置された建物特有の汚れや匂いは見受けられる。
だがベッドや家具類は掃除さえすれば使えるし、ざっと見まわした限り窓が割れていたりする所も無い様だ。
少しだけ気味の悪さを感じつつもそんな事を言っている場合でも無いので、頭を振って余計な考えを振り払いながらイチジクに齧り付くのだった。

◇

「とりあえずこんなもんか……」

建物内でもとりわけマシな部類の部屋を探し、ベッド周りだけ掃除を行う。
まだまだ匂いや汚れが気にはなるが、床や砂の上で寝るよりは体力も回復するだろう。
ただでさえ碌な食べ物が無いのだから、少しでも体力は温存すべきである。

「しかし、これからどうしたものか」

ベッドに体を投げ出しながら、今後の事について考える。
考えるが、分からないことだらけの現状で思いつくことなど何もないわけで。
とりあえず目先の目標は、『新しい情報が入るか、もしくは助けが来るまで何とか生き延びる』に満場一致で可決された。
満場一致も何も、自分1人しか居ないわけだが……。

歩き回ったせいか早くもウトウトし始め、まどろみに意識を手放そうとしている丁度その時、ドアの隙間から彼を見つめる視線が1つ。
マグカップ程の大きさしかないその視線の主は、彼が寝息を立て始めたことを確認するとそっと暗闇へと姿を消していった……

第０３話　初期艦との出会い

「んん……暑っ……」

掛布団も無いのに汗が滴る寝苦しさに目を開けると、そこは知らない天井だった。
寝起きの脳みそが一瞬混乱しそうになるものの、すぐに昨日あった出来事を思い出す。

「ああ、そういや無人島にいるんだっけ、俺……」

まだ頭が覚醒しきっていないまま周りを見渡しつつ、しばしボーっとする。
眠気覚ましのコーヒーでも飲みたい所だが、そんな贅沢を言っている場合ではない。
とりあえず、昨日朝食がわりにと採ってきておいたスモモを齧りつつ、今日の予定を決めていく。

「まずはまた水と木の実採取だな。その後は……１回この建物を見て回るか」

昨晩は部屋の掃除で精一杯で、今いるこの建物内の殆どを把握できていない。
もしかしたら有用な物があるかもしれないし、そもそも寝床に何があるかも分からないまま過ごすのは案外恐怖を感じるものである。
だいぶ覚醒してきた頭で今日の予定を組み立てつつベッドから降りると、そのまま水と食料の確保へ向かうのだった。

◇

食材と水を一通り採取し戻ってきた大樹は、建物内を探索することにした。
まずは全体構造の把握ということで、全２Ｆの建物内を歩いてみる。
どうやら軍隊か何かの宿舎のようで、１Ｆには食堂や会議室など、２Ｆには複数人で寝泊まりできるような部屋が多数あるようだ。
ただ、１Ｆの部屋のうち、工なんとかや入なんとかドック等、一部読み方が分からない部屋があった。
一通り２Ｆまで見て回った後、部屋の中を確認すると、入なんとかドックはお風呂の

ような作りになっていた。
なら素直に「風呂」と名付ければいいのに……と思いつついろいろ確認してみるが、どうにもお湯の出し方がわからない。
炎天下の中食材探しの為にジャングルを歩き回ったためせめてシャワーでも浴びたかったのだが……

次に工なんとかという部屋に入ってみると、見たこともないような巨大な機械が鎮座していた。
流石に電気が通っている気配はないが、そもそも何のための機械なのか分からないのでどちらにしても無用の長物である事に変わりはない。
一通り見て回った後部屋を後にしようとしたが、機械の隣に人1人が入れるくらいの、ＳＦで言う所のカプセル？のような物があった。
固く閉ざされたカプセルに惹かれ、周囲をいろいろと弄ってみる。すると……

「うおっ、何だ何だ!?」

プシューっという音と共に、カプセルから夥しい量の蒸気のような物が溢れだす。

思わず手で口を覆いながら遠巻きに観察していると、ガコンっと何かが外れるような音と共に、カプセルの蓋が開いていく。

「おいおい、エイリアンでも出てくるんじゃあるまいな……」

口ではそんな事を言いながらも、目はカプセルに釘付けになっている。

しばらく経った後、蒸気が薄れて来たと同時に、カプセル内で何かが蠢き始める。

冗談が現実になったか？と身構えるが、聞こえてきたのはエイリアンのうめき声などではなかった。

「んふぁ～……んん？どこだ、ここ？」

「な……人間が出てきた!?」

中から現れたのは、どう見ても人間の少女であった。

髪は腰辺りまで伸ばしており、ゆったりとしたウェーブがかかっている。

黒髪かと思ったが、一部は桃色に染まっている。どうなってるんだ、この髪？

身長はあまり高くなく、白のワイシャツに小豆色のベストのようなものを着ており、

どこかの女子高の制服かと思わせる服装をしている。
あと、でかい。どこがとは言わないが、身長の割にえらい協調されている。
これがトランジスタグラマーというやつか……
ふとそんなくだらない事を考えていると、寝起きのように体を伸ばしていた少女と目が合う。

「お、あんたが提督かい？あたしは長波。よろしくな！」
「は、え、提督？」
「なんだ、違うのか？」
「違うも何も、話についていけんぞ……」

人が出てきたことに加え、いきなり提督と呼ばれ絶賛大混乱中な大樹。
ひとまず提督ではない旨を話すと、じゃあ何処にいると聞かれる始末。
とりあえずお互いの認識を合わせないと始まりそうにもないので、今自分が置かれている現状やら何やらを分かる限りで伝える。

「するってーと、誰があたしを？」

「わからん……。そもそも記憶はないのか？」
「んにゃ、さっぱりだね。自分が建造艦なのかドロップ艦なのかすらも分からないな」
「建造？ドロップ？」
「ああ、その辺の知識も無いのか……しゃーない、説明しますかね」

全く話に着いていけない私に見かねたのか、自身を長波と呼ぶ少女はいろいろと説明してくれた。
自分は艦娘という存在で、それがどういった存在なのか。
本来であれば海軍から派遣される提督という人がいて、その人の元で深海棲艦という敵と戦うのが使命であること。
そして今いるここが鎮守府とよばれる基地であり、本来であればその提督という人がいる筈だということ等々。
正直全体の２割も信じることができていないが、彼女が嘘を言っているようには見えないし、そもそも記憶が無いまま気付いたら無人島にいた自分も大概である。

長い時間をかけてお互いの認識を合わせていく２人。
ここが正常に機能していない事に対して、最初こそ気落ちしていた長波だったが、割

とあっさりした性格なのかすぐに持ち直していた。
というか、ここには私しかいないという理由で提督と呼ばれることになってしまった。
本人曰く「そっちの方が呼びやすいから」という事らしい。
まぁここに私達しかいないのは事実のようだし、もし脱出できたのなら海軍本部にでも連れて行ければ、その後はちゃんとした鎮守府に連れて行ってもらえるだろう。

「とりあえずこの島を出るまではよろしく頼むよ、提督！」
「ああ、わかった。こちらこそよろしくな」

さっぱりとした笑顔を見せる長波と握手を交わす。
これが、私と最初の艦娘「長波」との出会いだった。

第０４話　新たな同居人、そして……

長波との出会いから早くも数日が経過していた。

あの後２人でこの島の脱出方法を模索したが、やはり具体案は出てこなかった。

というわけで、現在２人でサバイバル生活を絶賛継続中な訳だが、労働力が実質２倍になったおかげでいろいろと他の事にも手が回るようになってきた。

現在、長波は水の確保に向かっており、大樹は鎮守府カツコカリでとあるものを作っていた。

全てが現地調達＆手作りの釣り道具である。

竿はしなりがよく折れにくそうな木の枝をチョイス。糸は繊維質な木の幹を剥いで繊維を１本１本剥がし、数本を編み込んで丈夫さを持たせる。

針は小さい木の枝の両端を削ったもの、そしてウキは流れ着いた流木を干して乾かしたものを使用。

エサは浜辺で採取したイソメを使用するつもりだ。

正直これで釣れるかどうか分からないが、人が居ない分魚もスレていないだろうからきっとどうにかなるだろう。

ちなみに「女性に水汲みを任せるとは何事か！」というお叱りが飛んできそうな気もするが、彼女達艦娘というのは通常の人間よりずっと力持ちのようで、最近見つけたポリタンクに満タンに水を入れたものを軽々と持っていた。

艦娘については正直まだ分からない事だらけではあるが、普通に接する分には人間の女性と何ら変わりはない。

そのうえ艦娘の戦闘というものを未だ見たことが無い為、彼女たちが水上を走り、深海から迫る道の怪物たちと戦っていると言われてもピンと来ないのも事実である。

そんな事を考えながら仕掛けを作っていると、息を切らした長波が戻ってきた。

「て、提督……」

「どうした？そんなに息を切らせて……」

「いいからちょっと来てくれ！」

「お、おい!!」

半ば無理やり手を引かれながら長波の後を追う。

何やら緊急事態の様だが、まさか助けでも来たのだろうか？

手を引かれるまま砂浜へと来た大樹の前には、救助隊ではなく大きなコンテナが流れ

着いていた。

「ハァ、ハァ……提督、あれを見てくれ」
「……ふむ、珍しく大物が流れ着いたな」
「いや、コンテナもそうだけど、その向こう！」
「向こう……って、あれは人か!?」
「いや、あの２人も艦娘だよ。陽炎型の嵐と萩風……だったかな？コンテナと一緒に流れ着いたって事は、護衛任務中に敵襲にあったと見た」
「なるほど……まだ息はあるのか？」
「とりあえずまだ息はある。けどこのままじゃ……」
「わかった。とりあえず２人を鎮守府まで運ぶぞ。そのために呼んだのだろう？」
「さっすが提督！話が分かる男だね！」
「ここで見て見ぬ振りができるほど、落ちぶれちゃあいないさ」

そう言いつつ嵐を背負う大樹。そしてもう１人の萩風は長波が背負う事に。
流石の長波でも、２人を背負って戻ってくるには荷が重すぎたのだろう。
……長波なら頑張れば運べそうな気がしたのは内緒だ。

「大丈夫か提督？」
「問題ない。それより、２人の治療に必要な物はあるか？」
「うーん、とりあえずは人間と同じでいいんじゃないか？高速修復剤とかあればよかったんだけどなぁ……」
「高速修復剤？」
「艦娘の傷を一瞬で治す魔法の薬さ。何で出来てるのかは知らないけどね」
「……大丈夫なのか、それ？」
「さぁ……あたしも知識として持っているだけであって、使った記憶はないからな」
「そうか……」
「せめて妖精が居ればよかったんだが……提督は見た事ないよな？」
「あの建物に住み始めて数日経つが、未だ見た事はないな」
「だよなぁ。あそこにはもう妖精はいないのかねぇ……」

ため息をつきながらうなだれる長波。
まあ居ないものはしょうがない。出来る範囲で介抱してやるしかあるまい。
頭の中で必要なものを考えながら、２人は鎮守府へと歩みを進めるのであった。

◇

鎮守府へと戻ってきた２人は、思わず入り口前で立ち止まってしまう。
長波に至っては、開いた口が塞がらないといった感じである。
それもそのはず、鎮守府入り口で多数の妖精が勢揃いしていたのだから。

「長波、これはもしや……」
「ああ、さっき話してた妖精だよ。しっかし、こんなにいたとはなぁ……」

お互いに現実を確認しつつも、目は妖精に釘付けになっている。
そして当の妖精はそれぞれ「オカエリナサイー」とか「オフロジュンビデキテマスー」とか言っている。
……お風呂の準備というのがイマイチ理解できないが。
そんな中、最前列の中央にいた妖精が一歩前へ出ると、他の妖精よりもずっと流暢な言葉で話し始めた。

「はじめまして提督さん、長波さん。そしてずっと姿を見せず申し訳ありませんでした。私たちはこの鎮守府の妖精です」
「あ、ああ、はじめまして。正式な提督じゃないんだが、長波からは提督と呼ばれてる長谷川大樹だ」
「存じ上げております。提督がここにいらっしゃってからずっと、訳あって観察してましたので」
「観察？」
「ええ。『今度の提督の人柄』を知るために、あえて姿を見せず監視させて頂いてました」
「なるほど……いろいろ訳ありだったのだな。では、姿を見せてくれたという事は……」
「貴方になら力をお貸ししてもいいと、私達で相談して決めました。これからは出来うる限りお力添え致します」
「そうか、助かるよ。では早速出悪いんだが……」
「お二方の介抱ですね、お任せください。入渠ドックの方は準備できておりますので」
「話が早くて助かる。入渠ドックとやらまでは我々で運ぼう」

傍らで未だ呆けている長波に声をかけ、入渠ドックへと向かう。
ドック内は人間1人が入れるサイズの湯舟が4つ並んでおり、湯舟には薄緑色のお湯

のようなものが張られていた。

……なるほど、先ほどの「お風呂の準備」というのはこれのことか。

「この施設で２人を治療することが出来るのか？」

「はい。このドックには艦娘用の修復剤が混ぜられてますので、湯船に浸かっているだけで治療することができます」

「そういう事か。では長波、２人の介抱を頼んでもいいか？流石に私が服を脱がせるわけにもいかんからな」

「はいよー。長波サマにお任せあれ！」

２人の対応を長波に任せ、入渠ドックを後にする。

いろいろ準備が必要だと思っていたが、妖精たちのおかげでやる事が無くなってしまった。

はて、どうしたものか。

「……体の傷は治れど、体力までは回復するかどうか分からんしな。ここは１つ、食事に華を咲かせるために一働きするか」

そう1人呟くと、先ほど作っていた釣り道具を持ち、先ほどの海岸へと引き返すのだった。

◇

「ふむ、急ごしらえではあるが、思ったより使えるものだな」

本日5匹目の釣果を傍らに置き、それらを眺めながらぼそりと呟く。
本日の釣果はメバルが3匹とイシモチが2匹。
あまり大きなサイズではないが、あまり大きいと糸が切れてしまう可能性もあるので、丁度いいサイズと言えよう。
予め用意してあった蔓を5匹のエラから差し込み、まとめて持てるよう細工する。
これ以上釣っても、冷蔵庫が無く暖かいこの時期に保存する術がないので、この辺りで切り上げることにした。
「これとは別に、確認したい事もあるしな」

そう言いつつ向かったのは、２人が漂着していた浜辺である。
もちろん、一緒に流れ着いていたコンテナの中を確認する為である。
コンテナの扉を開けられるかという心配もあったが、どうやらそれは杞憂に終わったようだ。
扉を開けて中を確認すると、予想通り食料が積み込まれていた。
「レトルト食品や缶詰･瓶詰食品、調味料の類もあるな。浸水した形跡もないし、これは非常に助かるぞ」
だがいかんせん量が多すぎる。
とりあえず今持てる分だけ持ち帰り、後でまた取りに来ればいいだろう。
「既に2人も目を覚ましているかもしれんしな」
無事に目を覚ましていて欲しいと心の中で祈りながら、コンテナを後にする。
そして、久しぶりに木の実以外の食事にありつけそうな夕飯に、人知れず心を躍らせるのであった。

第０５話　決意

戦利品を抱え鎮守府まで戻ってくると、長波が待ち構えていた。
そういえば釣りに行く旨を伝え忘れていた。
「おーい提督！やっと帰ってきたか」
「すまん、２人に栄養のあるものをと思って魚を釣ってきた」
「ってマジか!?生まれてから木の実しか食べてなかったから楽しみだぜ！」
「そう言えばそうだったな……すまん」
「いやいや、提督のせいじゃないっしょ……って、そっちに抱えてるのは何だ？」
「こっちはレトルト食品ってやつだな。例のコンテナの中に入っていた」
抱えていたレトルトパウチのカレーを見せると、長波はパウチの文字をじっと見つめる。
心なしかさらにテンションが上がった気がする。
海軍と言えばカレーという事で、やはり軍艦もカレーが好きなのだろうか？
「ほうほう、これがカレーか」
「やっぱり好きなのか？カレー」

「もちろん食べた事は無いけど、なんつーかこう……心が躍る感じがするよ」
「そういうもんか……」
しばらく眺めて満足したのか、パウチを返してくる。
いや、そのまま持って行ってくれるとありがたいのだが……
「そう言えば、先ほどは私を探してたようだったが……何かあったのか？」
「あ、そうそう！２人が目を覚ましたんで呼びに来たのさ。そしたらどこにも居ないから探してたってわけ」
「そうか、目を覚ましたか…それはよかった」
「ああ、安心したよ。そんで２人が提督に会いたいって言ってるんだが」
「わかった、すぐに向かおう」
とりあえず魚とレトルト食品を食堂へ持っていく。
できれば冷蔵庫があると助かるのだが……人間にはない技術を持っているらしいので、あとで妖精に相談してみる事にする。
そんな事を考えているうちに、２人を連れて来たという部屋の前まで来ていた。
軽くドアをノックし了承を得てから中に入ると、嵐と萩風がこちらを向いて立っていた。
「失礼する。よかった、２人とも元気になったようだな」

「あ、あのっ、この度は助けて頂き、ありがとうございます！」
「ほんとサンキューな、司令！流石に沈んだかと思ったぜ……」
「ちょっと嵐！司令の前なんだから言葉遣いくらいちゃんとして！……すいません司令」
「いや構わない。私も正式な提督ではないからな」
「え？それはどういう……じゃあここは一体？」
「……長波、説明してなかったのか？」
「あー、忘れてたよ。いいじゃん、1から説明しようぜ」
「全く……」
悪びれも無くそんな事を言う長波にため息をつきながら、とりあえず2人に現状の説明をする。
2人は最初こそ驚いていたものの、話が終わるころにはとりあえず落ち着いたようだ。
「そういう訳なので、しばらくはこの島を出ることは出来ないんだ……申し訳ない」
「いえそんな……顔を上げて下さい、司令！」
「そうだよ、司令のせいじゃないんだし。のんびり行こうぜ！」
「そう言ってもらえると助かる」

とりあえず２人とも、ここでの生活に納得してくれたようだ。
ホッとしている所に、萩風から素朴な質問が投げられた。
「そう言えば、この鎮守府には妖精さんっていないんですか？」
「いや、いるぞ。ちょうど君たち２人を鎮守府へ連れて来た時に、初めて姿を見せてくれたよ」
「２人を入れたドックの準備をしてくれたのも妖精だぜ」
「では妖精さんに頼んで、司令を乗せる船を作ってもらって、それを私たちが引っ張っていくっていうのは……？」
「できなくはないと思うが、燃料等の資材が無くてな……それに私も記憶が無いので、どの方角に行けば帰れるか分からないんだ」
「あ、そうですよね……ごめんなさい」
「バカだなぁはぎぃは」
「嵐うるさい！」
じゃれ合う２人を見つめながら、再度この場所の事を考える。
先ほど「どの方角に行けばいいか分からない」とは言ったが、ある程度は予測がついている。
コンテナが流れ着いていたことを考えれば、２人が流れ着いた海岸から出れば、少な

くとも輸送船などの航路にぶつかる可能性は高いだろう。
だが、やはり燃料の問題もありチャンスは1度しかないし、慎重に行きたいというのが本音だ。
それに、下手に希望を持たせてがっかりさせるのは、2人の精神衛生上よろしくないだろう。
長波は別として、2人にはちゃんと帰るべき場所があるのだから。
「そう言えば、2人はどこの鎮守府の所属だったんだ？」
「あ、それは……」
「横須賀第3鎮守府だぜ」
なぜか言いにくそうにする萩風の代わりに嵐が答えてくれた。
答えてはくれたものの、2人の表情は硬い……はて、聞いてはいけない事だったのだろうか？
「すまない、聞いたらマズい事だっただろうか？」
「いや、そんな事はねぇよ。どこから来たのか確認するのは当たり前だと思うし。だけどなぁ……」
「うん……」
「??」

「あー、うちの鎮守府は所謂ブラック鎮守府とか言われる類でさ……無理な出撃や遠征、補給は最低限、艦娘を兵器としか見てないから轟沈やむなしっていう所だったんだよ」
「ブラック鎮守府……」
「今回輸送船が敵に奇襲された時も「駆逐艦を盾にしてでも輸送船は守れ！任務の失敗だけは絶対に許さん！」って言われてさ……最終的にはこのザマって訳だ」
　なるほど、これでは２人の表情も硬くなるわけだ。
　ブラック鎮守府という言葉自体は初めて聞いたが、２人を見ればどれだけ過酷な環境だったのかが見て取れる。
「そうだったのか……嫌なことを思い出させてしまって済まない。しかしそうなると、いざ帰れたとしてもどうするべきか……」
「あ、あのっ！」
「ん？」
　今まで俯いていた萩風が急にこちらを向いたかと思うと、必死な表情でこちらを見つめていた。
　何か考えがあるのだろうか？
「できれば、私達２人をここで建造された事にしてくれませんか？」
「はぎぃ……」

「残ってる皆には申し訳ないけど、もうあの鎮守府には戻りたくない……」
「……」
目に涙を浮かべながら懇願する萩風。
私としては問題ないのだが、そのような事が可能なのだろうか？
「長波、２人をここで生まれた事にすることは可能か？」
「大丈夫なんじゃね？身体に焼き印でも捺されてるなら別だけど」
「ふむ……ならば問題ないな。２人がそれでいいのなら、ここで生まれた事にしよう」
「あ、ありがとうございます、司令！」
「戻らなくて済むのか……よかったなはぎい。司令もありがとな」
泣きながら喜ぶ萩風を嵐が抱きしめ、互いに喜びを分かち合っている。
しかし、人間の為に命を懸けて戦ってくれている彼女たちにそのような仕打ちを与えるとは……顔も知らないその提督に怒りを覚える。
彼女達を盾にするなど、やる事がもはや人間のそれではないな。
「だが私は正式な提督ではないから、無事に戻れたとしてもどうなるか分からんぞ？それでもいいのか？」
「はい。あの鎮守府に戻るくらいなら……」
「いっそ艤装を解体して、司令に養ってもらうってのはどうだ？」

「あ、嵐!?何言ってるの！」
「いいね～それ。その時はあたしも一緒に養ってくれよな」
「長波さんまで……」
「おいおい……」
そんな話で盛り上がっているうちに、先ほどの暗い雰囲気が霧散していることに気付いた。
まあ私にどこまでできるか分からないが、少なくともこの子達を無事に本土へ帰すまでは全力で事に当たろう。
じゃれついてくる皆の相手をしながら、そう決心するのだった。

第０６話　続々と増える仲間たち

嵐と萩風が島に漂流してきて早数週間が過ぎた。
航路からだいぶ離れているのか、待てど暮らせど近くを船が通りかかる事は無かった。
とまあ現状はあまり変わっていないように見えるが、確実に変わっている事がいくつかある。
例えば……
「おーい提督、１名様追加ね～」
「今日もか……艦娘が漂流するっていう事例はそんなに多いものなのか？」
「いやいや、流石にそんな訳ないと思うぜ。明らかに異常だよ」
「ふむ、なんとも面妖な……とりあえずその子をドックへ」
「あいよー」
このように、島に漂流してくる艦娘が最近異常に増え始めた。
それに比例して輸送船のコンテナが流れ着く回数も増えたのだが、いかんせん燃料や弾薬などの資材は未だ集まらない。

嵐や萩風の話だと、燃料をタンカーで輸送するのではなく、大量のドラム缶などに入れて輸送している場合もあるらしいので、それが漂着する可能性もあるはずなのだが……

少なくとも今の所食料には事欠かないので、気長に待つことにしている。

次に変わったことと言えば……

「司令、魚釣ってきたぜ！」

「今日はカレイが多めに釣れたので、煮付けにしようと思います」

「嵐、萩風、２人ともお疲れ様。食堂の冷蔵庫に入れておいてくれ」

「下処理はしなくていいのか？」

「ああ、あとで私がやっておこう」

「ありがとうございます、司令！どうしても魚を捌くのは苦手で……」

「いや、構わない。最近仲間が増えたおかげで手持無沙汰でな……いい暇つぶしになる」

鎮守府に冷蔵庫が設置され、また自家発電が可能になった。

これは気温の高いこの島で暮らしていくうえで非常に重要なものとなっている。

尚、冷蔵庫や発電機自体は元々ここにあったらしいのだが、どちらも妖精が自作したものらしい。

詳しい話を聞こうとしたら「企業秘密です」と言われてしまったため、発電機が何を

燃料にして動いているのかすら分からずじまいだが……

また、日々漂着してくる艦娘を迎え入れていくうちに、この鎮守府もだいぶ大所帯になってきた。

具体的には、嵐と萩風を除いても今日漂着してきた子で15人目になる。

数週間のうちにこれだけの艦娘が漂着してくるのは流石におかしいと思い、近くで大規模な戦闘でもあったのか各々に聞いて回ってみたが、理由も元の所属鎮守府もバラバラであった。

そのうち一部の子は同じ鎮守府に所属していた仲間同士だったようで、お互い再会を喜び合っていた。

ただ、1つだけ全員に共通している事があるとすれば、全員がブラック鎮守府に所属していたことだろうか。

現在日本にはかなり多くの鎮守府があるようで、全体から見ればブラックな鎮守府はごく少数という事だが、そこに所属している子ばかりが集まるのは、何か神の見えざる手が働きかけているような気がしてならない。

「とりあえず、2人が釣ってきてくれた魚を処理するか……」

考え事をしているうちに、ずいぶんと時間が経ってしまっていた。

夕飯の時間が遅れると一部の子が騒ぎだすので、さっさと処理してしまわないとマズ

いだろう。
以前遅れた時の惨状を思い出しながら、大樹は食堂へと向かうのであった。

◇

「ん、先客がいたか」
「あら提督、お疲れ様です」
「お疲れ様、鳳翔。どれ、私も手伝おう」
「ありがとうございます。では、こちらをお願い出来ますか？」
「わかった。任せてくれ」
食堂の調理場へ向かうと、鳳翔が先に魚の下処理を始めていた。
彼女もまたこの島へ漂着してきたうちの１人で、よくこうして家事や炊事をしてくれている。
彼女も例に漏れずひどい環境の鎮守府にいたようで、初めて手伝おうとした時などは大層驚かれたものだ。
今ではここでの生活に慣れたようで、手伝いを買って出れば一部を任せてくれるようにはなった。

正直私が手伝うよりも、手際のよい鳳翔1人の方が効率が良い気もするのだが、本人曰く「今まで誰かと料理を作ったことがないので、できれば是非ご一緒に」という事なので、厚意に甘えさせてもらっている。
「今日は萩風が、カレイの煮付けを作ると意気込んでいたな」
「いいカレイが手に入りましたからね。できればお肉や野菜を使った料理も作りたい所ではあるのですが……」
「瓶詰のピクルス等は以前漂着したこともあったが、流石に牛肉や豚肉となると、冷凍であってもこの気温だと難しいだろう」
「そうですね。真空パックのチャーシューなどはまだあるのですが……」
「……そう考えると、皆には不自由な暮らしをさせてしまっているな。すまない」
「いえそんな！提督のせいじゃありませんし、食べるものが全く無いわけでもありませんから。それにむしろ、私達を受け入れてくれている提督に迷惑が……」
「それこそ君たちのせいではない。元居た鎮守府より気兼ねなく暮らせているのなら、それはなによりも喜ばしいことだ。……まあ食生活は抜きにして、だが」
「……提督が、本当の提督だったらよかったのに」
「何か言ったか？鳳翔」
「い、いえ何も！さあっ、早く処理してしまいましょう！」

「あ、ああ……」
急に慌てだした鳳翔に驚きつつも、いつの間にか止まっていた手を再度動かす。
若干頬が赤くなっているのは気のせいだろうか。
なんとも言えない空気に包まれながらも、夕飯に向けて処理を進めるのであった。

◇

「「いただきまーす！」」
鎮守府内の時計は全て止まっていたため正確には分からないが、外を見る限り１９：００頃だろうか。
食堂に集まった皆が一斉に食事へと手を伸ばす。
ワイワイガヤガヤと、まるで学校の給食のような雰囲気で食事を行う皆を眺めながら、今日漂着してきた子の容体を長波に尋ねる。
「ん？ああ、ここに来る前に見に行ったけどまだ眠ってたよ」
「そうか……そろそろ目を覚ましてもいいと思うんだがな」
「わりかし大きいケガしてたし、何より正規空母だから入渠に時間がかかってるみたいだな」

「正規空母だったのか。という事は赤城や加賀と同じ艦種という事でいいんだよな？」
「そうそう。また大食らいが増えるね～」
「そう言うな。それもまた個性だ」
「物は言いようだな……とりあえず診てくれてる妖精には、目が覚めて歩けるようなら食堂へ来るよう伝えてあるから、そのうち来るんじゃないか？」
「そうか、ありがとう」
そんな会話をしながら、以前鎮守府に漂着した赤城と加賀へと視線を移す。
２人は和気藹々と食事をしている……ように見えるが、よく見ると目にも止まらぬ速さでおかずの取り合いをしている。
どうやら艦娘というのは艦種によって食事量も違うようで、２人のような正規空母や戦艦と呼ばれる艦種は、飛びぬけて食事量が多いらしい。
燃料や弾薬などの資材の消費量も多いらしいのだが、なぜそれが食事量にまで反映されてしまったのかは不明である。
とりあえず正規空母が増えるという旨は、同じ艦種の２人には言っておいた方がいいだろうか。
水面下で必死の抗争を繰り広げている２人に近づき声をかける。
「赤城、加賀。食事中にすまない」

「ふぁい？どうひまひた、てひとく？」
「赤城さん、流石に口に物を入れたまま喋るのはどうかと思うのだけれど……」
「むぐむぐ……ごくんっ。失礼しました、あまりに煮付けがおいしかったもので……」
「い、いや構わない。実は今日また１人島に漂着してな……それがどうやら正規空母らしいんだ」
「あら、空母仲間が増えるのですね。流石に気分が高揚します」
「軽空母の鳳翔さんを含めると４人目ですね」
「ああ。なので一応同じ艦種の２人の耳にも入れておこうと思ってな」
「ありがとうございます。今はまだ入渠中ですか？」
「ああ、そうらしい。よかったら食事後にでも様子を見に行ってもらえるか？」
「わかりました、そうしますね」
「……その必要はないみたいですよ、赤城さん」
「え？」
加賀の視線の先を辿ると、今まさに食堂へ入ってこようとしている艦娘がいた。
どうやら先に目を覚ましたらしい……のだが、なぜか加賀が敵意むき出しの視線で彼女を睨んでいる。
普段からクールで落ち着いた言動に定評のある加賀がここまで豹変するとは……以

前の鎮守府で何か因縁でもあったのだろうか？

とりあえず、どうしていいか分からないといった感じでこちらを見つめている彼女に声をかける事にする。

「目が覚めたようでなによりだ」

「あ、貴方は？」

「私はここの提督……という事になっているが、その話は後だ。とりあえず、食欲があるなら食べながらでもいいので現状を説明したいのだが……」

「あ、はい……実はお腹ぺこぺこで。ご馳走になっちゃっていいんですか？」

「ああ、構わない。ではこっちへ来てくれ」

そう言いながら、赤城と加賀が居るテーブルの空きへと連れてくる。

途中まできた時、急に彼女の足が止まったので振り返ると、なにやら加賀の方を指さしてわなわなとしている。

どうかしたか？と聞く前に、彼女の大声が食堂内に響き渡った。

「あーーーーーー!!加賀さん!?なんでここにっ!?」

「食事中に大声を上げるなんて……これだから五航戦は」

「再会して最初のセリフがそれっ!?相変わらず冷たい人ですね！」

「……なんですって？」

「ま、まあまあ2人とも、折角再会できたんですしもっと穏便に……。久しぶりね、瑞鶴」
「あ、赤城さんもいたんですね！お久しぶりです！」
「……私との温度差がありすぎないかしら？」
「いつもの「これだから五航戦は」を再会1発目に披露してくれた人に言われたくありませーん」
「……」
　出会っていきなり口論になる加賀と瑞鶴。そしてそれを宥める赤城。
　怒涛の展開に全く着いていけてないが、とりあえず3人とも顔見知りであるという事だけは分かった。
「えー、瑞鶴……でよかったか？君も彼女達と同じ鎮守府に？」
「あ、はい。同じ鎮守府でした」
「そうか、再会できたようで何よりだ」
「できれば再会したくなかった人もいますけど……」
「全く、先輩を敬うという事を知らない子ね。これだから五航戦は……」
「もーまたそれ!?いい加減それやめて下さいよ！」
「あはは……すいません提督、騒がしくしてしまって」
「構わないさ。何やら訳ありの様だからな」

「そう言ってもらえると助かります。もう昔からあの2人はあんな感じで……」
やれやれといった表情で2人を見つめる赤城。
まあ仲が悪いにしろ何にしろ、見知った仲間が居るというのはありがたい。
「とりあえず現状の説明をしたいのだが……鳳翔、まだ食事は残ってるか？」
「ええ、残ってますよ。そちらの子に？」
「ああ、頼む」
トレーを持ってきてくれた鳳翔から食事を受け取ったのを確認し、食べながら聞いてくれと前置きして説明を始める。
やはり他の子と同じような反応を示していたが、とりあえず現状がどうなっているか認識してもらえたようだ。
……途中、加賀が瑞鶴のおかずを取ろうとして一悶着あったが、赤城曰く「日常茶飯事でした」という事なので気にしない事にする。
まあ2人もやっていたしな。
「じゃあ、私もここに居ていいんですか？」
「もちろん、君が納得してくれたのなら大歓迎だ。今の所食料に関しては、偏りのあるものの備蓄はある。それさえ気にしなければ普通に暮らせるレベルにはなっている……と思うぞ」

「ええ、いつの間にか水道設備も整っていましたし、お風呂にも入れますよ」
「あ、ありがとう！……じゃなくて、ありがとうございます！」
「あと、私も正式な提督ではないので、無理に敬語を使う必要もないぞ？」
「わかった！ありがとう提督さんっ！」
「いきなり敬語をやめるなんて……これだから」
「五航戦はって？いい加減泣くわよ!?」
「……冗談よ」
「嘘！へんな間があったもん！」
「２人とも落ち着いて…」
また２人の口論が始まったなと思いつつ、赤城も苦労しているのだなと考える。
それにしても、なぜ急に漂着する艦娘が増えたのか、そして何故全員がブラック鎮守府所属だったのか。
更に言えば、自分がこの地へ降り立った意味や、なぜ自分の記憶が無いのか等、謎は深まるばかりである。
ただ分かるのは、まだしばらくここでの生活が余儀なくされるであろうという事。
そして、漂着してくる艦娘はさらに増えるのだろうという謎の確信。
分からない事や不安な点など多々あれど、楽しそうに食事をとる彼女たちを見ている

と、この生活も捨てたものではないなと思う自分もいる。

ただ願うのは、ここに流れ着いた彼女たちが、元の鎮守府生活よりも気兼ねなく過ごしてくれること。

そして日本へ戻り元の鎮守府とは決別し、新たな生活の第一歩を踏み出してほしい。

そんな願いを胸に秘めながら、大樹は彼女達を慈しむように眺めるのであった。

現在編
第０７話　現在の日常

「この鎮守府も、随分と仲間が増えたものだな」
飲み終えたコーヒーカップをソーサーの上に置きながらポツリと呟く。
だいぶ長々と思い出に浸っていたようで、最後のひと口は完全に冷めていた。
メタな事を言うのであれば、５話分くらい回想していただろうか。
「ホントだよなぁ……俺らもここまで増えるとは思わなかったよ」
「流石に異常ですよね。元の建物じゃ部屋が足りないからって、妖精さんに増築してもらった位ですし」
「まあ、何故か漂着する食料も比例して増えるんだ。私のやる事も変わらないさ」
そう、未だに鎮守府の仲間は刻一刻と増えているのだ。
瑞鶴が漂着して以降も数日に１人のペースで増え続け、今や５０人を超える大所帯となった。
流石に相部屋にしても部屋数が足りなくなって来た為妖精に相談してみたところ、数時間で３階が出来上がっていた……本当に未知の技術である。

ちなみに、不定期に漂着するコンテナを資材にして溜めていた為、増築用の資材には事欠かなかった。

まあ未だに燃料や弾薬、あとはボーキサイト（後で知ったことだが、空母の運用には必要不可欠との事）については、待てど暮らせど一向に漂着しないのだが……

「さて、そろそろ食堂の開く時間だ。朝食を食べに行くか」

「おっ、もうそんな時間かぁ」

「司令といると時間が過ぎるのが早いです。不思議ですよね」

そんな事を言いながら微笑みかけてくる萩風。

果たしてそれはいい意味なのか悪い意味なのか……過去の記憶が無いので女性の接し方について不作法が無いか常に心配しているのだが、彼女の笑顔を見る限り不快な思いはさせていないだろうと思う。

こういう場合も何と返せばいいか分からなかった為、とりあえず微笑み返しておく。

「そうと決まれば早めに行くか。一航戦に後れを取るわけにはいかん」

「うーい」

「はい、司令！」

３人分のコーヒーカップを水に浸けてから、執務室兼私室を後にする。

一同が目指すは食堂、朝の戦場である。

◇

「お、提督じゃんか。今から朝食か？」
「長波か、おはよう。今日は２人のお蔭で早めに目覚めたからな」
「２人？……ああ、嵐と萩風か」
「うーっす、長波！」
「おはよう、長波」
「おはよー。なるほど、そう言えば昨晩は荒れてたもんな」
「えへへ……」
「未だにああいう夜は苦手だぜ……」
朝の挨拶を済ませると、長波を加えて食堂へと向かう。
食堂に近づくにつれ、朝食のいい香りが漂ってくる。
それにつれて腹の虫が騒ぎだしたのを感じ、思わず少し早足になる。
３人と歩くこと数分、食堂の扉までやってくる。
既に結構な人数が集まっているのか、扉越しにワイワイとした雰囲気が漂ってくる。
「む、今日はみんな早いな」

「やっぱり昨日の嵐でよく眠れなかったんじゃないか？」
「かもしれないな……」
「ん、呼んだか？」
「嵐じゃなくて、天気の嵐の方よ……」
「ややこしいな。ゲシュタルト崩壊しそうだ」
「ホントだよ……」
「まあまあ……とりあえず入りましょう？」
萩風に促され食堂に入ると、既に全体の半数以上が集まっており、各々仲が良いもの同士で集まって朝食を摂っていた。
カウンターへ朝食を取りに行く途中、大樹が来たことに気付いた艦娘達が次々と挨拶していく。
運よく早めに気付いた者の中には、髪形を確認したり人1人が座れるよう席をずれたりしているが、割と空腹が限界な大樹は気付くことも無く進んでいく。
「おはよう鳳翔、間宮」
「おはようございます、提督」
「あら、おはようございます。提督も今日はお早いのですね」
「ああ、早めに目が覚めたからな。2人も朝早くからすまないな」

「いえいえ、好きでやっている事ですから」
「そうですよ！……まあ欲を言えば、久しぶりに甘味なんかも作りたいんですけどね……」
「缶詰の小豆でも漂着すればよいのだがな……」
挨拶もそこそこに、鳳翔から朝食が乗ったトレーを受け取る。
ちなみに間宮もここに漂着した艦娘であるが、彼女は非戦闘艦である。
無論例に漏れず真っ黒な鎮守府にいた訳だが、もちろん最初は出撃した事もなかったそうだ。
しかし、度重なる味方の轟沈で戦闘艦が減ってくると次第に出撃にも回されるようになり、最終的にはやはり味方の盾にさせられたそうだ。
さらに彼女は普段ずっと鎮守府にいた事もあってか、提督の悪行をずっと目の前で見せられていたのだろう。最初は私にも心を開いてくれなかった。
泣きながらこちらに単装砲を突き付けながら「もう人間を信じられない」と告白された時は、本当にどうすればいいのか分からなかった。
しかしここで暮らすうちに少しずつ打ち解けていき、今ではお互いの間にわだかまりは無くなった……と思う。
「ふふ……」

「どうしました提督？珍しくご機嫌なようですが」
「いやなに、間宮も随分と打ち解けてくれたなと思ってな」
「それは……あの時はまだ人間を信じられなくて……」
「責めている訳じゃないさ。君がいた鎮守府の環境下にずっといたら、誰だって人間を信じられなくなる。同じ人間として恥ずかしい……本当にすまないと思っている」
「もう！提督はいつもそうやって自分を悪く言うんですから……提督には感謝しきれないほど助けられているんですから、頭を上げて下さい！」
「間宮さんの言う通りですよ、提督。あなたが受け入れてくれたから私たちは新しい生活に踏み出すことが出来たんです。だからもう同じような事で謝らないで下さいね？」
「……ああ、分かったよ。ありがとう」
逆に2人に励まされてしまうとは情けない……そう思いながらも、なんとなく心の枷が1つ取れた様なすがすがしい気分だ。
とりあえず2人に感謝を告げた後、朝食のトレーを持ったまま座れそうな席を探す。
見回してみると、いつの間にか朝食を受け取っていた長波たちがこちらに手を振っているのでそこへ向かう。
開けた席に座ってもらえなかった艦娘達が小さなため息をつくが、大樹には聞こえていなかった。

「すまん、遅くなった」
「なんかやらかしたのか？間宮さんに頭下げてたけど……」
「いや、何でもないんだ。気にしないでくれ」
「??」
　あんまり納得してなさそうな長波を適当にあしらいつつ、朝食に手を伸ばす。
　この鎮守府では出されることの多い焼き魚定食ではあるが、鳳翔と間宮が毎回味を変えてなるべく飽きないよう工夫してくれているので、そこに不満を漏らす者は未だいない。
　今日の焼き魚も美味そうだ、と考えながら箸を伸ばそうとすると、誰もいなかったはずの右側から口元に魚の切り身が寄せられる。
　驚いて振り返ると、ニコニコとした笑みを浮かべた鹿島が箸を伸ばしていた。
「はい提督さん、あーん♪」
「いや鹿島、ケガしてるわけでもないし、自分で食べられるぞ……」
「あーん♪」
「だから鹿島……」
「あーーーん♪」
「……」

これは絶対に引かないつもりだな……

仕方が無いので、差し出された魚を頬張る事にする。

……なにやらこちらを向く視線が強くなった気がするが、気のせいとしておこう。

「うふふ、美味しいですか？」

「あ、ああ……」

「じゃあ次はご飯ですね。はい、あーん♪」

「まだ続くのか……」

「おーおー、鹿島さんやるねぇ！」

「羨まし……ハッ!?私は何を……」

「はぎぃも参戦してくればいいんじゃね？」

「無理無理！恥ずかしくて死んじゃうよ……」

「お前ら……頼むから助けてくれ」

「いいじゃんか提督。役得ってやつだよ」

「……」

その後、結局すべて食べ終わるまであーんは続いた。

途中から観戦に徹していた艦娘の一部が参戦してきた事もあり、朝食に有した時間は実に1時間にのぼった。

◇

「なあ提督、機嫌直してくれって～」
「……」
「途中で助けなかったのは悪かったけどさ、何もそこまで怒らなくても……」
「……怒ってなどいない」
「嘘つけ！声色が既に怒ってるじゃんか！」
朝食後、途中で助けなかったことを謝罪してくる長波と執務室へ戻る。
実際本当に怒ってはいないのだが……ちょっとした意趣返しという奴だ。
接しやすい長波だからこそ出来る対応ではあるが、自分も随分と子供っぽい所があるなと改めて感じる。
「冗談だ。まあ助けて欲しかったのは本当だが、彼女達も悪気があっての事ではないからな」
「なんだよビックリさせんなよなぁ……」
「すまんすまん」
「……ま、お互い様ってことで。んで、今日はどうするんだ？」

「どうするも何も、やる事はいつもと変わらんさ。とりあえず漂着物を確認しに行くぞ」
「あいよー。今日は何が着いてるかねぇ……」
「間宮にも言われたが、小豆でも漂着していれば良いのだがな。もし漂着していれば、間宮特製の甘味が味わえるぞ」
「マジか!?間宮さんの甘味は絶品っていう事は何故か覚えてるんだけど、食べた記憶は無いからな……」
「あくまで漂着していれば、の話だがな。それに加工品の缶詰となると間宮の本領が発揮できるかどうか……」
「何にしても、貴重な甘味であることに変わりないんだ。漂着してる事を祈りながら見に行こうぜ!」
「ああ、そうだな」
既に目が輝いている長波は、スキップでも始めそうな勢いで歩を進めていく。
彼女の願いが叶う事を祈りながら、大樹も後に続くのであった。

第０８話　珍客

艦娘や食料が流れ着く浜辺を通り過ぎ、さらに奥へと向かうと岩礁になっている部分がある。

最初は専ら釣り専用の場所であったが、つい最近は別の目的でも来るようになった。

「提督ー！採ってきたよー」

「はふぅ、さすがこの辺の海は綺麗ね。透明度が違うわ！」

「お疲れ様、ゴーヤ、イムヤ。採ってきたものはこの袋に入れておいてくれ」

「はーい」

「この位私達にかかれば簡単簡単♪」

「２人のお蔭で料理の幅が広がったと間宮たちも喜んでいたよ。本当にありがとう」

「えへへ～♪」

「全く……ゴーヤは本当司令官にデレデレね……」

「……そう言うイムヤも顔が真っ赤でち」

「……っ!?うっさい！」

大樹に頭を撫でられながら、ゴーヤとイムヤがじゃれ合う。

そんな2人を眺めつつ、2人が採ってきたものに視線を向ける。
多めに持ってきた袋にこれでもかと詰め込まれたサザエやウニが、陽の光を浴びて輝いている。
そう、これが釣り以外にここへ来る事になった理由である。
イムヤとゴーヤ、正しくは伊168と伊58は共に潜水艦の艦娘である。
他の艦娘とは桁違いの低燃費さと、駆逐艦や軽巡などの一部の敵からしか攻撃を受けないという利点を生かして戦う艦種だという。
だがその利点も彼女達にとっては喜ばしい事ではなく、多くの鎮守府で彼女たち潜水艦を酷使した資材集めが行われているらしい。
ここに居るイムヤとゴーヤは同じ鎮守府所属で、多分に漏れずそういう酷い労働環境下に居たらしいのだが、積み重なった疲労で注意力が散漫となっていた所に敵の爆雷が炸裂し、気付いた時にはここに流れ着いていたとの事だ。
尚、現在も潜って食料を集めてもらっていたが、燃料が無いので艤装の力は使わず素潜りで採ってきてもらっている。
その為長時間潜っている事はできないが、これまた他の艦娘とは桁違いの潜水スキルを有効活用し、こうして食卓に華を添える手伝いをしてくれている。
本当は、元居た鎮守府での傷を癒す事に専念してほしかったのだが、彼女達も泳ぐこ

と自体はやはり好きなようで、趣味と実益を兼ねているとまで言われたら納得せざるを得ないだろう。

「司令官、もっと採ってきた方がいい？」

「ゴーヤたちはまだまだいけるよ！」

「いや、これ以上採っても持ち帰れないだろう。今日の所はこれで大丈夫だ」

「赤城さん達満足してくれるかな？」

「大丈夫だろう……大丈夫、彼女達を信じよう」

「それ多分ダメなフラグでち……」

そう呟きながら、２人は岩場へと上がってくる。

こういう場所でないとサザエやウニは採れないからな……砂浜は砂浜で潮干狩りでもすれば、アサリやシジミやハマグリなんかが採れるかもしれないが、そっちはまた今度でいいだろう。

「ああ、もしまだ泳ぎ足りないのなら自由にしてくれてもいいぞ。今まであまり好きに泳ぐ機会など無かっただろう？」

「うーん、でも今日はもういいかな。いつでも泳ぎに来れるしね！」

「うんうん！今は海で冷えた体を提督に暖めてもらう時間でち！」

そう言いながら腰のあたりに抱き付いてくるゴーヤ。

人付き合いの苦手な私とて男色の気があるわけではないのだから、できればこの過剰なスキンシップを控えてくれるとありがたいのだが……

とは言え体が冷え切っているのは本当のようで、僅かだがゴーヤの体が震えている。

やはり艦娘とはいえ艤装を使わなければ、普通の人間とあまり変わらないのかもしれない。

「ちょっとゴーヤ！司令官の服が濡れちゃうでしょ！」

「なに、少しくらい濡れても構わんさ。それよりも、2人こそ風邪ひかないようにな」

「そうでち！イムヤも提督にくっつくといいよ！」

「えっ、でも……」

「まあくっつかないなら、ゴーヤが独り占めするからいいけどねー♪」

「ぬぐぐ……えいっ!!」

「おっと」

「やっときたでち。イムヤは意気地が無いでちね」

「うるさいゴーヤ！」

「まあまあ、落ち着け2人とも。くっつかれたまま暴れられたら歩けんぞ」

何やらまたじゃれ合いを始めてしまった二人を眺めながら、ゆっくりと鎮守府へ歩みを進める。

はてさて、今日はこのサザエやウニでどんな料理ができるのだろうか？
最近徐々に充実してきた食事を密かに楽しみにしつつ、そんな事を考えるのだった。

◇

「ん？また誰か流れ着いているようだな」
「ほんとだ！提督、早く助けにいくでち！」
「わ、分かってるから引っ張らないでくれ、ゴーヤ」
「落ち着きなさいよもう……」
帰り際に浜辺付近を通ると、また１人漂着しているようだった。
とりあえず急いで鎮守府へ連れて帰ろうと近づくが、途中でゴーヤとイムヤが足を止め服の裾を引っ張る。
何事かと２人を見ると、２人は驚愕の表情を浮かべていた。
漂着している子に何が……と思いよく確認すると、確かに普通の艦娘とは違うようだった。
身体は小さく、身長は恐らく長波達よりももっと低いだろう。
それよりも目を引くのが、白粉でも塗ったのかと思う程白い肌と、その肌と同じくら

い真っ白な髪だ。
今までに漂着した艦娘の中にも真っ白な髪を持つ子はいたが、肌は常人と同じ色をしていたはずだ。それに比べてこの子の白さは少し異常だ。
アルビノの肌を持つ人を見た事は無いが、こんな感じなのだろうか……？
ふと我に返ったのか、２人が急に大きな声を上げる。
「なんで深海棲艦が!?」
「しかもこいつ北方棲姫でち！やばいでち!!」
「深海棲艦だと……!?しかし北方棲姫とは？」
「北方海域にいる深海棲艦……のボス的存在ね。北方棲姫っていうのはこっちの勝手な呼び方らしいけど……」
「見た目は小さいけど、強さは一級でち！」
そんな北方にいるはずの深海棲艦が、なぜこんな暑い地域の無人島へ？
そんな疑問が湧いたが、今一番気にするべきはそこではないだろう。
敵ならば今のうちに対処しておくべきか……しかし、パッと見は普通の少女であるこの子を手にかけるのは……
どう動くべきか悩んでいると、ふとゴーヤが何かに気付いたようだ。
「……あれ？そういえばこいつ艤装が無いでちね」

「そう言われると確かに……手負いってことかしら？」
「手負いという事は、近くで艦娘と戦争をしたという事だろうか？」
「ここがどこだか分からない以上、なんとも言えないわね……」
「そうか。せめて会話が可能ならば分かる事もあっただろうが……」
「可能だよ？北方棲姫は喋れるでち」
「む、そうなのか？」
「普通なら喋らないんだけど、一部の深海棲艦は喋れるの。そういう深海棲艦は名前に姫とか鬼とか付けられて差別化されてるわ」
「ならば話は早い、２人とも手を貸してくれ」
「手…って、もしかして連れて帰る気でちか!?」
「危ないわよ司令官！」
「艤装が見当たらないという事は、攻撃手段は無いはずだろう？それに、何故かこの子からは邪気を感じない。だから大丈夫だと思う」
「……あーもう！どうなっても知らないんだから！」
「やけくそでち！」
「ありがとう、２人とも」
何とか２人を説得すると、２人に貝の入った袋を手渡し、北方棲姫を抱き上げる。

北方棲姫は見た目の通り非常に軽く、これならば余裕で鎮守府まで連れていけるだろう。

隣でイムヤとゴーヤが「わっ、お姫様だっこだ……」「深海棲艦のくせにずるいでち……」と呟いていたが、大樹の耳には入っていなかった。

◇

「んで、結局そのまま連れて帰ってきたってわけか」

「あ、ああ。しかし長波、なぜ私は正座させられてるんだ？」

「当たり前だろ！あたしも優秀な提督を沢山見て来たけど、ここまでお人好しな提督は……いないぞ？」

そう言いながら、長波は大きなため息をついた。

北方棲姫を連れて帰ってきた後艦娘達には大層驚かれ、彼女を入渠ドックへ入れる頃には長波まで話が伝わっていたらしい。

唖然とする妖精に北方棲姫を託してドックから出ようとした所、笑顔で仁王立ちしている長波につかまってしまい、現在執務室で正座させられているという訳だ。

「いや、彼女に同情したわけでは無いぞ。何か有意義な話が聞けるかと思ってだな……」

「どうせ助けようかどうか迷った挙句、イムヤ達に会話できることを聞いたんだろ？そんでいい大義名分を見つけて今に至る……と」
「む……なぜ分かったんだ？」
「まだ日は浅いけど、あたしは提督の初期艦だぜ？わからいでか」
「そうか……」
　ちょっとドヤ顔になっている長波を見つめつつも、考えることは北方棲姫の事である。
　やはり入渠ドックへ入れてしまったのは失敗だっただろうか？
　艤装が見当たらないとはいえ、ドックで回復したら復活している可能性もあるのだが……
「まあなんだ、話を聞くときは腕に自信のある子をボディガードに付けるから」
「当たり前だっつーの！……そんときゃあたしも同席させろよ？」
「ああ、分かった。心配してくれてありがとうな」
「べ、別に……初期艦だからな、仕方なくだよ。仕方なく」
「それでもありがとう。長波は優しいな」
「……ほっとけ」
　珍しく頬を染めたレア長波を見つめながら、頭を撫でる大樹。

とは言いつつ、照れているのは分かっても理由までは分かっていない彼も大概である。

何となく頭を撫でていた手は、長波が恥ずかしさに耐えられなくなって暴れ出すまで、止まる事は無かった。

◇

「ン……ココハ？」
「目が覚めましたか？」
「ダレ……？」
「私はこの鎮守府の妖精です」
「チンジュフ……ッ!?」
「そう、貴方達と敵対していた人間と艦娘がいる所ですよ。尤も、ここは今正式な鎮守府ではありませんけどね」
「ナゼ……タスケタ？」
「それは提督に聞いてみないと何とも……少なくとも、拷問とかそういう事をする人じゃないので安心してください」

「……アッテミタイ、テイトクニ」
「分かりました。とりあえず目を覚ましたことを伝えます」
「……ウン」
そう言うと、妖精はどこかへ行ってしまった。
周りを見渡してみるが、他に誰かが監視している様子は無い。
なんて不用意なんだと思いつつ、北方棲姫は艤装を確認しようとした所でハッと気づく。
（ソウダ、ギソウハカイサレタンダッタ……）
思わずため息をつくと、自分がこれからどうなるのかを考える。
拷問はしないと言っていたが、こちらは深海棲艦。しかも一部とはいえ、北方海域の深海棲艦達を束ねていた存在である。
いろいろと聞かれた挙句に沈められる、それが一番あり得る未来なのかもしれない。
「オネエ……チャン……」
そう呟く北方棲姫の瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちた。
かつて姉のように慕っていた存在を思い浮かべながら……

第０９話　新たな風

　コンコン
「失礼する」
「……っ！」
　北方棲姫が目を覚ましたとの連絡を受け、長波と共にドックへとやってきた。
　急に入ってきた人間の姿にビクッとしながらも、北方棲姫はこちらを見つめている。
　パッと見る限り艤装が復活している様子は無く、とりあえず鎮守府内で暴れる心配はなさそうだ。
「彼女にこっちの言葉は分かるのか？」
「多分通じるはずだぜ」
「そうか……」
　いつまでも入り口で様子を伺っていても仕方ないので、北方棲姫の元へ歩み寄る。
　こちらを警戒しているのか、多少ビクビクしながらも北方棲姫は視線を逸らさない。
「目が覚めたようでなにより。こちらの言葉は分かるかい？」
「……ウン、ワカル」

「それならば良かった。私は一応ここの提督で、こっちは艦娘の長波だ。君は北方棲姫で間違いないか？」
「ウン……デモ、ナンデニンゲンノテイトクガ、ワタシヲタスケタ？」
「話せば長くなるんだが、正確には提督モドキなんだ、私は」
「……モドキ？」
「ああ、実は……」
　とりあえずこちらの現状を一通り説明する。
　本来ならば情報漏えいがどうだとか上から文句を言われそうだが、正式な鎮守府でない以上知ったことではない。
　そんな糞の役にも立たない事なんかよりも、長波達をこの島から出してやる方法の方が重要なのである。
　長くなり過ぎないよう適度に説明をすると、北方棲姫は一度だけ大きく頷く素振りをした。
「ナルホド……ソレデ、ワタシハコレカラドウナルノ？」
「とりあえず君の艤装は壊れている様だし、暴れたりしない限りはこちらから危害を加えるつもりは無い。だいぶ消耗していたようだし、今は体を休めることを第一に考えるといい」

「ジンモントカシナイノ？」
「そのつもりは無い。この島を出ることが最優先とは言ったが、少なくとも今のところは急ぐつもりもないよ」
「ソウ……」
「ああ。……そういえば、君たちは普段何を食べているんだ？一応果物を持ってきたんだが食べられそうか？」
「イツモハ、サカナトカカイトカヲタベテル。クダモノ？ツテイウノハ、タベタコトナイ」
「うへぇ、魚介類ばっかりかぁ。流石に飽きそうだなぁ」
「そうだな、それに栄養も偏りそうだ。とりあえず皮を剥いておくので、少し食べてみると良い」
ここに来る途中に食堂から持ってきたリンゴの皮を剥こうとし、ふと手を止める大樹。
長波が不思議に思っていると、皮を剥くのをやめ先に6等分にし始めた。
そして慣れた手つきで切れ込みを入れ、一部の皮を剥いて北方棲姫に手渡す。
「ほう、うさぎ型に切ったのか。相変わらず器用な事するねぇ」
「なに、やり方さえ知っていれば難しいものではないさ。もちろん似合わない事も重々

承知の上だがね」
　皮を剥きながら長波と軽口を言い合っている間、北方棲姫の視線はリンゴに釘付けだった。
　期待しているのか、不安がっているのかは分からないが、しばらくリンゴを見つめた後に思い切ったようにひと齧りする。
　そして瑞々しい甘さと程よい酸味に口の中を支配された北方棲姫は、最初こそ驚いた表情を見せていたものの、気付けば蕩けたような笑みに代わっていた。
「オイシイ！コレオイシイ!!」
「そうか、それならよかった。魚介類では出せない味だから心配だったが……」
「モットタベタイ！」
「慌てずともうすぐ剥き終わる……っと。ほら、全部食べていいぞ」
「ンン～、ナンコタベテモオイシイ！ソレニカワイイ！」
「海にはウサギはいないし、いらぬ気づかいかと思ったが、喜んでくれたようでよかった」
　どこからか「ウサギはいるピョン！ぷっぷくぷ～!!」という抗議の声が聞こえて来た気がしたが気のせいと言う事にしておき、皿に盛られたリンゴを両手で掴んで美味しそうに頬張る北方棲姫を眺める。

確かに肌や髪は白いが、こうやって見ると人間の幼な子と何ら変わりがないように見える。

もちろん私自身が彼女達深海棲艦と戦った事が無い、というのも大きいとは思うが。

「食べながらで良いので教えてほしい。君はここがどこだか分かるかい？」

「……ワカラナイ。キヅイタラココニナガサレテタカラ……」

「そうか……」

「タダオボエテルノハ、ミタコトモナイヤツラガセメテキテ、スミカヲオワレタコトダケ……」

「見たことの無いやつら？それは艦娘とは違うのか？」

「タブンチガウ。ドチラカトイウト、ワタシタチニチカイイキモノ。デモミタコトナイヤツラデ、ミンナシズンデ……ウウ、オネエチャン……」

「す、すまない。辛い事を思い出させてしまったな」

「やーい泣かせたー！」

「やかましい！……それで、お姉ちゃんと言うのは？」

「コーワンオネエチャン……オナジシンカイセイカンデ、イツモヤサシクシテクレテタ……」

「なるほど……できれば会わせてあげたいが、さっき説明した通りこちらもこの場所に

ついては全く知らないんだ。申し訳ない……」
「ンーン、ダイジョブ。ナイテバカリイルト、オネエチャンニオコラレル」
「そうか、強い子だな君は……」
「ン……」
北方棲姫の健気な姿に心を打たれたのか、思わず頭を撫でてしまう。
彼女も嫌がる素振りをせず、気持ちよさそうに目を細めている。
そして疲れがたまっていたのか、いつの間にかウトウトとし始めていた。
「眠いのか？」
「ン、ネムイ……」
「このドック、傷はある程度癒えても、体の疲れまでは取れないみたいだからな。まだ傷も治りきっていないようだし、眠いのならそのまま眠ってしまって構わない」
「ワカッタ……アリ…ガトウ……テートク……」
「……」
こちらへのお礼を言い終えたのとほぼ同時に、睡魔に負けてしまったようだ。
起こさないようゆっくりとドックへ寝かせると、長波と共に部屋を後にする。
ドック内には北方棲姫の静かな寝息だけが響き渡っていた。

◇

「んで、これからどうすんのさ?」
「とりあえずは鎮守府で面倒見るしかあるまい」
「皆納得するかねぇ……」
「してもらわんと困る。あのような姿を見せられては、おいそれと追い出す気にもならんよ」
そう言いながら皆への説明内容を考える。
考えるも何も、とりあえずありのままを伝えて、しばらくこの鎮守府に置いておく事を伝えるだけなのだが……
助けられた恩義を感じているのか、皆異常なほど大樹に懐いている為、深海棲艦のしかも親玉クラスと一つ屋根の下で暮らすことに異議を申し立ててくる可能性が高い。
とはいえ先ほども言った通り追い出す事もできないので、なんとか納得させる方法を模索しているのだが……
「やはり反発は免れないか……」
「だろうねぇ。提督を命の危険に晒すなんて、とてもじゃないが皆が許すとは思えないぞ。あたしだって実際に会うまでは納得できなかったんだし」

「ふむ……どうしたものか」
　とりあえずこの事を知らせなければ皆の反応も分からないので、所属艦娘全員を食堂へ集める。
　そして、何事かとざわめく彼女達に説明を始めたはいいのだが……
「断固反対だ！」
「長門……」
　艦隊のまとめ役となりつつある長門が、真っ先に異議を申し立てて来た。
　さらに長門に続くかのように、あちこちからも反発の声が上がっている。
　予想はしていたが、ここまで反対されるとは思わなんだ。
「提督は我々にとって命の恩人というべき人だ。その人の願いとあっては叶えてあげたいが、それが原因で危険に晒すことになっては本末転倒だ」
「しかしだな、長門……」
「現在彼女が戦闘できない事は理解した。だがもし仲間を呼ぶ方法を隠し持っていたとしたらどうする？」
「それは……」
「分かってくれ提督。これは提督の為なんだ」
　長門の熱弁に後ろの艦娘達も同意の意思を示している。

これは困った……はて、どうしたものか。
「長門さん、1ついいか？」
「長波か。本当は初期艦であるお前が止めなければならないんだぞ」
「それはそうなんだけどさ……少なくとも今の北方棲姫が提督に害を及ぼす事は無いと思うぞ」
「理由は？」
「勘……かな。実際に北方棲姫に会えばわかると思うけど、あいつが提督をどうこうできるとは到底思えないんだよ」
まさか「勘」と来るとは思っていなかった長門は思わずため息をつく。
「実際に会った長波がそう言うか……しかし」
「ここはあたしに免じて、しばらく様子を見させてやってくれないかな？それとも、長門型のネームシップともあろうお方が、提督を守り切る自信がないと？」
「言ってくれるなぁ長波。わかった、とりあえず暫く様子を見よう。だが少しでもへんな真似をしたら……」
「その時は提督の意見関係なく追い出せばいいさ。な、いいだろ提督？」
「あ、ああ……それで皆が納得してくれるなら」
最終的には長波の意見が通り、暫く様子見として北方棲姫を鎮守府に置くことに決

まった。
　もちろん北方棲姫の監視や大樹の護衛などは行うようで、「ローテーションはこちらで決める！」と追い出されてしまった。
　どうも長波に発破をかけられたせいか、長門は妙に張り切っていた。
　おかしなことにならなければいいのだが……

◇

「ん～～、ほっぽちゃんは可愛いでちゅね～♪」
「ハナセ！ハナッ……カエレ！」
「……どうしてこうなった」
「あたしにも分からん……」
　あれから数日後……長門は真っ先に懐柔されていた。
　姉妹艦の陸奥が言うには、長門は元々可愛いもの好きだったらしく、そこへ来て北方棲姫の幼子のような振る舞いに胸を打ちぬかれたようだ。
　尚、ここまでひどい変わりようは無いにしても、既に鎮守府のマスコットとして皆に愛されるようになっていた。

おかしなことにはなったが、心配していたような結果ではないようなので、まあ良しとしよう。
「とりあえずは嫌われてないようで安心した。これも長波のおかげだな」
「ふふ～ん、長波様にかかればこんな問題楽勝だよ！」
「だとしても助けられた事に変わりはない。何か礼をしたい所だが……いかんせんこんな孤島ではな……」
「貸し1つってことにしておくよ。あとで返してくれよ？」
「無理難題でなければな。覚えておこう」
「やりぃ！」
指を鳴らして喜ぶ長波の後ろでは、北方棲姫が未だに長門に拘束されてもがいていた。
深海棲艦まで増え始め、今後どうなるのか想像もつかないが、とりあえず今はこの平和を噛みしめることにしよう。

番外編０１　北方棲姫の１日

時刻［〇五〇〇］
起床の時間。
北方棲姫の朝は早い。
「ホ、ホプゥ……朝だ……」
まだ朝日の昇っていないうちに目を覚ます。
誰かに「早く起きろ」と言われたわけでもないのだが、深海とは違った環境のせいかどうしてもこの時間に起きてしまう。
とは言え、流石に起きて即眠気が無くなる訳では無く、まだ少し眠たそうな目を擦りながら洗面所へと向かう。
尚、口調がだいぶ流暢になっているのは、艦娘達に発音等をいろいろ教わったからである。決して作者がカタカナで書くのが面倒とかそんな理由ではない。いいね？
まだ大樹が鎮守府に来たばかりの頃は毎日水を汲みに行っていたが、今では妖精の謎技術により鎮守府内に水道が整備されている。
特殊な装置で海水を濾過しているらしいが、発電機と同じく詳細については「企業秘

密」との事だ。
　だが、各部屋まで配管を回すのは、さしもの妖精と言えども面倒なようで、今整っているのは食堂や入浴施設、共同の洗面所のみとなっている。
　うつらうつらした北方棲姫が洗面所へ来ると、既に数名の先客が居た。
　朝によく鉢合わせるメンバーだったこともあり、驚きもせず挨拶を交わす。
「ポ……おはよう……」
「あ、ほっぽちゃん！おはよ～」
「おはよう。今日も早いのね」
「おはよう北方棲姫。早起きなのは良い事だ。健やかな成長は規則正しい生活で培われるものだからな」
　洗面所に居たのは、長良・大鳳・那智の3人だった。
　この3人は自主トレーニングが好きなようで、晴れている日は必ず3人でジョギングをしているらしい。
　そもそもこの島に雨が降る事自体かなり稀なので、ほぼ毎日と言ってもいい。
「早く起きられるなら、また私達と早朝ジョギングに行こうよ！」
「朝の空気は気持ちいいわよ。終わった後の朝ごはんも美味しく食べられるし」
「ふむ、いい案だな。どうだ北方棲姫？前は厳しくしすぎたが、今度は手加減するぞ？」

「朝から走るのは、ちょっとつらい……」
３人からの誘いに乗り気じゃないのは、スポーツが苦手だからではない。
以前1度だけランニングに誘われたことがあり、軽い気持ちで参加したら地獄を見たのだ。
特に、自分にも他人にも厳しいストイックな那智のコーチングは厳しく、ランニング後は朝食も食べずに昼までバタンキューであった。
もちろん那智とて北方棲姫をいじめている訳ではないのだが、トレーニングの事となるとどうしても熱が入りすぎてしまうらしい。
「そうか、残念だ……」
「今まで陸上を走ったことなんて無かったもんね。仕方ないよ」
「もし気が変わったら教えてね。ランニングじゃなくてもいいから」
「うん、ありがとう……」
そう言って3人と分かれた北方棲姫は、改めて顔を洗い始める。
既に先ほどの会話で7割方目は覚めていたが、やはり流水で顔を洗うとサッパリ具合が違う。
「ぷはっ……海の上なら負けないのに……むぅ」
そんな事をぼやきながら、洗い終えた顔をタオルで拭く北方棲姫。

以前のランニングで見せつけられた差を思い出したのか、その表情は心なしか悔しそうだった。

◇

時刻［〇五三〇］

次に北方棲姫は、日課となっているある場所へと足を運んだ。

この時間だからこそ人が居ないものの、あと2時間もすれば朝の戦場と化すその場所は、言わずもがな食堂であった。

北方棲姫が鎮守府に来た頃のわだかまりは既に姿形も無いが、それでも仲の良さには差が出るものである。

言動はともかく容姿が幼い北方棲姫は、とりわけ鎮守府でも大人な艦娘に大層気に入られていた。

言うなれば「北方棲姫ＬＯＶＥ勢」と言うのだろうか……そのうちの2人が既にここへ来ており、朝の戦場に華を添えるべくせっせと料理に勤しんでいた。

「鳳翔お姉ちゃん、間宮お姉ちゃん、おはよう」

「あら、ほっぽちゃん。おはようございます。また手伝いに来てくれたの？」

「うん。いつも優しくしてくれるから、恩返し！」
「おはようほっぽちゃん。ホントいい子ね……」
「えへへ……」
間宮に撫でられながら、北方棲姫はほんの少し照れながらも、ふんわりとした笑顔を浮かべる。
故郷の姉と生き別れたせいか、北方棲姫自信も姉のような存在である鳳翔や間宮達を大いに慕っていた。
そして彼女達に恩返しをしたいと大樹に相談したところ、早起きの利点を生かして「朝食の準備の手伝い」を提案されたわけだ。
「んと、ホッポは何すればいい？」
「じゃあちょうど今ジャガイモが茹で上がったから、ボールに入れて潰してほしいかな」
「じゃがいも……もしかして!?」
「そう、ほっぽちゃんの大好きなポテトサラダですよ♪」
「ポポ！頑張る！」
「他にもいろいろ食べさせてあげたいんだけど、ここだと日持ちする根菜とかしか無いですからね……」
「いつか向こうに戻れて、今みたいにここにいる皆で過ごせる、なんて事になってくれた

ら最高なんだけど……」
「元居た鎮守府には二度と戻りたくは無いですが、日常生活という面ではやはり不便ですからね、ここ。それに……」
「ほっぽちゃんの処遇もどうなるか分からないものね。こんな可愛くても深海棲艦なのだし……」
「ポッ……ポポッ……」
今度は鳳翔に撫でられながら、必死にジャガイモを潰していく北方棲姫。
隣で2人が少ししんみりした雰囲気になっている事などつゆ知らず。
北方棲姫の頭の中には、朝食に並んだホクホクのポテトサラダしか浮かんでいなかった。
だがそれが幸いしたのか、一生懸命作業を続ける北方棲姫を見つめる2人は、どちらからともなく笑みを浮かべた。
「とりあえず今は……」
「私たちの仕事を一生懸命にこなす、ですね！」
「ええ、そうね。あの提督に着いていけば、きっと大丈夫よ」
「そうですね！」
「ポ！じゃがいも潰し終わった！次は何すればいい？」

「じゃあ次は……」
北方棲姫の姿に勇気付けられた２人は、改めて朝食の準備へと戻る。
ニコニコと微笑みを浮かべている２人の姉を見て、何となく胸がポカポカする気持ちになるのだった。

◇

時刻［〇七三〇］
朝食の時間。
食べ始めるや否や、長門が食事を食べさせようと絡んでくる。
鳳翔に弓を構えられ、すごすごと引き下がる所までが毎朝の恒例行事である。

◇

時刻［一三〇〇］
朝食、昼食を済ませた北方棲姫は、当ても無く廊下を歩いていた。
どうやら昼食を食べ過ぎたようで、じっとしていると速攻で睡魔に負けそうだったか

らだ。
ちなみに昼食は、先日漂着した缶詰のランチョンミートを使用したジャーマンポテトだった。
肉類は加工品ですら貴重品の為殆ど食事に出てくることはないのだが、このランチョンミートに関しては驚くほど大量に漂着していたらしい。
尚、潜水艦組のゴーヤが「ゴーヤさえあればチャンプルーにできるのに……ぐぬぬ……」と唸っていた。
そんな昼食時の風景を思い浮かべながら歩いていると、前方から駆逐艦の艦娘が４人並んで歩いてきた。
「お、あれはほっぽちゃんじゃねーですかい？」
「ほんとだ、何やってるのかしら？」
「何か眠そうだね……」
「暇つぶしになる事でも探してるんじゃないかな？……多分」
前方からやってきたのは、綾波型の漣・曙・潮・朧だった。
その昔「第七駆逐隊」という隊に所属していたメンバーらしく、だいたいいつも４人で行動しているようだ。
４人とも北方棲姫とは遊び仲間であり、島の探検に行ったり、食材探しに行ったり、大

樹にいたずらを仕掛けたり（主に仕掛けて怒られるのは漣）する仲である。
「ポ……どっか行くの？」
「いや～、やることが無くて暇だから釣りにでも行こうかと……」
「ほっぽちゃんも行く？」
「行く！」
「じゃあ釣り道具をもう１セット持ってこないとね」
「釣り道具もってるよ？テートクにもらった！」
「く、クソ提督からのプレゼント……別に羨ましくなんてないけど！」
　何やら曙が１人でぷんすこしているが放置しつつ、北方棲姫も釣りセットを持って海岸へと向かう。
　相変わらず雨が降りそうもない晴天の中、いつもの釣りスポットへとたどり着いた５人は、早速釣り糸を垂らす。
「ポッ、来たっ！」
「わぁ、ほっぽちゃんすごーい！」
「流石ご主人さまの英才教育に隙は無かった……！」
「何だかんだで、ほっぽちゃんが一番提督と釣りした回数多いよね」
「……むぅ」

大樹の指導の賜物か、次々と魚を釣り上げていく北方棲姫。
それに続くように漣達も数匹の魚を釣り上げる。
ちなみに、曙だけボウズであった……

◇

時刻［一五〇〇］
おやつの時間。
長門が大量のお菓子を抱えながら北方棲姫を誘う。
お菓子は欲しいが捕まるとまた面倒な事になるので、数個のお菓子を奪って逃走する。
長門は泣いた。

◇

時刻［一八三〇］
夕食の時間。

昼に漣達と釣ってきた魚が刺身となって食卓に並んでいた。
少し自慢げになりながら夕食を食べる北方棲姫の隣では、隼鷹と飛鷹が刺身に舌鼓を打っていた。
「新鮮な刺身ってのはいいねぇ～。惜しむらくは酒が無い事か……」
「贅沢言わないの。飲みたいのは隼鷹だけじゃないんだから」
「そうだけどよぉ……そう言えば、ほっぽは酒飲んだことあるのかい？」
「お酒……飲んだことないよ？」
「たとえ飲めるとしても、この子に飲ませちゃ駄目でしょ、絵面的に……」
「別に人間じゃないんだし、気にすること無いと思うんだがねぇ」
「飛鷹も隼鷹もお酒好き？」
「おお、もちろんさ！酒は私の命の源と言っても過言じゃないね」
「ここまで言い切るのはどうかと思うけど、お酒自体は私も好きよ」
「ふーん……おいしいの？」
「おっ、もしかして興味あるのかい？じゃあ今度漂着したら一緒に……」
「やめなさいっ！」
「あだっ！」
酒の席に北方棲姫を誘おうとした隼鷹だったが、飛鷹に思いっきりシバかれる。

……ちょっと興味があったので、少しだけ残念に思う北方棲姫だった。

◇

時刻［二〇〇〇］
お風呂の時間。
ゆったりと湯船に浸かる北方棲姫に飛びつこうとする長門だったが、姉妹艦である陸奥の容赦ない第３砲塔チョップで阻止されていた。
尚、北方棲姫が風呂からあがってからもしばらく、頭にたんこぶを作ったまま湯船に浮いていたらしい。

◇

時刻［二二〇〇］
就寝の時間。
ふと姉の港湾棲姫の事を思い出して人恋しさを感じた北方棲姫は、枕を持って大樹の部屋へと向かう。

大樹もこれが初めてではないのか、夜中に訪ねて来た北方棲姫に驚きもせず部屋へと入れる。
「ポ……今日も一緒に寝ていい？」
「また姉の事を思い出したのか？」
「……うん」
「……仕方ないな、ほら」
「……ありがと」
１人分のスペースを開けてくれた大樹にお礼を言うと、もぞもぞと布団の中へ入っていく。
人肌で温められた布団が被さり、何とも言えない心地良さに包まれる北方棲姫。
以前大樹から「できる限り艦娘と一緒に寝るように」と言われ、数名と一緒に寝た事はあったのだが、どうしても大樹ほどの安心感を得ることは出来なかった。
結局大樹が折れる形となり、時折こうして一緒に寝るようになったのだ。
「あったかい……」
「そうか……眠れそうか？」
「うん……」
胸元に抱き付くような体制の北方棲姫の頭を、手櫛で髪を梳くようにして撫でる。

優しい手の感触が気持ちいいのか、これをやると数分で眠りに落ちてくれるので、添い寝するときはいつもこうしている。

今回も始めてから数分でウトウトとし始め、気付けば北方棲姫の意識は夢の中へと溶け込んでいた。

「姉か……なんとか再会させてあげたいものだが……」

すやすやと眠る北方棲姫を見つめながら、大樹は1人そう呟くのだった。

第１０話　過去

とある日の昼下がり、大樹は工廠を目指して歩いていた。
目的はもちろん妖精だが、いつもと同じく何かを作ってもらう為ではなかった。
「あ、提督……こんにちは」
「潮か。どうだ、ここにはもう慣れたか？」
「は、はい！七駆の皆にも会えましたし、提督には本当に感謝してます……」
「なに、私は何もしていないさ。それに他の七駆の皆も元気になったようだし。正直君の事を辛そうに話す彼女達は見ていられなかったからな」
「私だけここに来るのが遅れちゃいましたからね……皆にも心配かけちゃいました」
「仕方あるまい。七駆では唯一の改二艦なのだから、重宝されるのは当然だ」
「はい……」
工廠に行く途中で潮と出会ったので、軽く世間話に花を咲かせる。
間宮の時もそうだったが、彼女も負けず劣らず打ち解けるまでに時間が掛かった。
今でこそこうして普通に会話できるまでになったが、ここへ来た当初は、それはもう酷いものだった。

今まで漂着した艦娘達は皆、ブラック鎮守府と言われる酷い環境下にいた事は以前説明しただろう。

そしてそういう環境下に居た子の反応は、大体が大まかに3パターンに分けられる。

まず1つ目は、最初からある程度友好的なパターンである。

元居た鎮守府の重圧から解放された反動か、すぐにこの鎮守府に馴染むことが出来る。

言ってしまえば、一番手のかからないパターンなので非常にありがたい。

2つ目は、提督もしくは人間そのものに敵意や殺意をむき出しにするパターンだ。

1番身の危険を感じるパターンではあるが、こういった子は姉妹艦や仲のいい子が沈んだりしてしまった事が原因である事が多い。

そして何の因果か、その原因となった子が先にここへ漂着している場合が殆どであり、鎮守府に馴染むのも意外と早かったりするのだ。

そして1番対応に困ってしまうのが、以前の提督に暴行などを受けて人間不信になっているパターンであり、潮もここに入る。

元々気が弱い子に多いようで、中には性的な暴行を受けた子もいるようだ。

そういう子にはあまり無理に接したりせず、じっくりと時間をかけて馴染んでもらうようにしている。

潮以外だと名取や榛名が当てはまるのだが、今では皆それなりに会話ができるまで馴染んでくれている。
「提督はこれからどちらへ……？」
「ちょっと工廠の妖精の所にな」
「また何か作ってもらうんですか？」
「いや、今回は別件だ。少し気になる事があってな……」
「気になる事、ですか」
「ああ。……潮は今のこの状況をどう思う？」
「この状況と言うのは……いろんな艦娘が漂着している事ですか？」
「そうだ」
「うーん……」
大樹の質問を受け、考え込む素振りをする潮。
今回妖精の元へ行く理由が、まさにこれなのだ。
最近はあまり考えない事にしていたが、流石に艦娘の人数が増えすぎており、もはや偶然で片づけることはできない。
また、我々を生かしておく為かと疑いたくなる頻度で漂着する食料や、そして一向に漂着しない資源。

誰だって、何かしらの見えざる手が働いているように思えるだろう。
「確かに、ちょっと偶然にしてはできすぎてますよね……」
「ああ。漂着したのが2～3人ならともかく、連合艦隊が複数編成できるレベルの人数となると話が変わってくる。しかも皆同じ鎮守府所属という訳でもない」
「ここが地球のどの辺りなのか分かりませんが、元居た鎮守府同士の距離が結構離れてる子もいますもんね……」
「うむ。そういう事で見て見ぬふりもそろそろ潮時かと思い、妖精にいろいろ聞いてみようかと思ってな。どうやら彼らは昔からここに居たようだし、何か知っているかもしれん」
「うーん、どうなんでしょう？知ってたとしたら既に教えてくれててもいいと思うんですが……」
「それもそうなんだがな。かと言ってやる事もないから……まあ暇つぶしと思ってもらっても構わんさ」
「なるほど……」
真面目な表情で頷く潮。
正直に言えば暇つぶしが8割位を占めているのだが、あえて言う必要はないだろう。
どちらにしても、今後も今までのようにずっと食料が漂着し続ける確証はないのだか

ら、何もせずに惰眠を貪るよりは幾分か有意義であると思いたい。
「潮はどこかへ行く途中だったのか？」
「えと、七駆のメンバーとほっぽちゃんで釣りに行ったんですが、全員餌を忘れちゃって……」
「なるほど……一応現地でも探せばイソメなんかは見つかると思うが、苦手な子も多いからな」
「はい、私もちょっと無理です……」
「まあ無理もあるまい。とりあえずは、北方棲姫も皆に受け入れてもらえているようで安心したよ」
「ふふっ。もう鎮守府のマスコットみたいになってますね」
「そうだな。……あまり皆を待たせるのも悪いだろうし、私はここで失礼するよ」
「あっ、すいません引き留めちゃって……」
「いや、気にしなくていいさ。さっきも言ったが暇つぶしも兼ねてるからな。気をつけて行ってくるんだぞ？」
「はい！」
元気よく返事をした潮は、小走りで外へと向かっていった。
しかし、昼食後に北方棲姫の姿が見当たらないと思ったが、そういう事だったのか。

ふと、以前話していた北方棲姫の姉について思い出した。
（あとは姉に会わせてやれればいいんだがな……）
涙ながらに姉の事を語る北方棲姫の姿を思い出しながら、工廠へと向かうのだった。

◇

「うーん、特にこれと言って思い当たる節はないですね……」
「そうか……」
数分後、工廠にて先ほどの件を妖精に尋ねてみるも、手掛かりになりそうな情報を得ることはできなかった。
やはり潮の言っていた通り、何か知っていれば既に話しているだろうか。
「君は昔からこの鎮守府に居たはずだったな」
「ええ、ここに提督や艦娘がいた頃ももちろん知ってますが……」
「当時の事を教えてもらえないだろうか？」
「ええ、構いませんが……あまりいい話ではありませんよ？」
「問題ない。今は少しでも情報が欲しいのでな」
とりあえずここに人が居た頃の話を教えてもらえることにはなったが、どうやら妖精

はあまり乗り気ではないようだ。
それもその筈、この鎮守府もかつてはれっきとしたブラック鎮守府だったからである。
かつてここにいた提督は、艦娘を完全に兵器として扱っていたようで、中破・大破は日常茶飯事、更には轟沈も厭わない指揮をしていたらしい。
本人は自分の事をエリートだと思っていたようで、こんな辺鄙な孤島へ配属された事も加わってか、艦娘への暴行等も頻繁に行われていたようだ。
それを見ていた妖精たちが一斉にボイコット、運営の改善を要求したが取り合ってもらえなかったようで、彼らは完全に「艦娘の為」を念頭に仕事をしていたとの事。
その為提督との衝突も幾度となくあったらしいが、艦娘を人質に取られては言いなりになるしか無かったのだ。
ところが、そんな運営にも突然最期が訪れた。
各地に蔓延っていた深海棲艦が、一挙に日本本土へと押し寄せて来たのだ。
今までも深海棲艦が侵攻してきた事はあったが、その時の数は今までの比ではなかったらしい。
当然日本も全力で迎撃する為、各地の鎮守府へ出動を要請した。
もちろんこの鎮守府も例外ではなく、提督は「上層部へアピールするチャンス」と言

いながら、鎮守府を守るメンバーすら残さず全ての艦娘を伴って抜錨するも、提督を含め誰一人戻ってきた者はいなかった。
　ここに漂着した艦娘達からの話を聞くに、どうやら当時の深海棲艦の侵攻は退けられたようだが、この鎮守府の艦隊だけは誰も知らなかった。
　そして、それ以降は大樹が漂着するまで無人の鎮守府のままだったらしい。
「そんな事があったのか……だから君たちは最初から姿を見せなかったのだな」
「ええ。あの時も言いましたが、しばらく見極めさせてもらっていました」
「そんな理由があったのなら仕方あるまい。……しかしそうなると、提督を含む全ての艦娘が深海棲艦によって沈められたのか……」
「ええ、恐らくは。ただ、環境は劣悪でしたが艦娘達の練度はかなり高かったので、よほど当時の深海棲艦が脅威だったか、もしくは……」
「もしくは……？」
「いえ、何でもありません。まだ想像の域を出ないので……」
　何やら思わせぶりな対応をする妖精。
　とりあえず今は1つでも多くの情報が欲しいので、続きを促すことにする。
「構わない、思いつきでも何でも話してくれ」
「……この前北方棲姫が漂着した時の会話、覚えていますか？」

「もちろん覚えているさ」
「北方棲姫が漂着した理由について聞いたとき、彼女は「見たことの無い敵に攻撃を受けた」と言っていましたよね？」
「そう言えばそうだったな……まさか」
「その「見たことの無い敵」が原因の可能性もあるのでは、と思った次第です」
「なるほどな……」
　妖精の言う通り、目を覚ました北方棲姫はこう言っていた。
「見たことの無いやつらに住処を追われた」と。
　通常の深海棲艦すら見た事が無いのでイマイチイメージが湧かないが、ゴーヤ達が言うには北方海域を纏めるボス的な存在の北方棲姫が、艤装を破壊され住処を追われる程の脅威だったという事だ。
　そんな敵に相対してしまったのなら、艦隊が全滅したという話もあながち的外れでもないかも知れない。
「とりあえずこの鎮守府の過去については分かったが……ここの現状が説明できるような理由はやはり見つからないな」
「お役に立てず、申し訳ないです……」
「いや、こちらこそ色々聞いてしまってすまなかった。君たちにとっても辛い過去だっ

た事に変わりはないのに……」

「それこそ心配無用です。我々はあなたの力になると決めたのですから」

「そう言ってもらえると助かるよ」

既に生活を豊かにするための技術をいろいろ提供してもらってはいるが、彼の言葉を聞き、改めて受け入れてもらえてよかったと思えた。

相変わらず未来の保証ができない生活に変わりはないが、それでも自分は間違っていないと思えるのは存外嬉しいものだ。

改めて妖精に礼を言うと、その足で工廠を後にする大樹。

彼は気付いていなかった。

妖精が、何ともいえない表情で大樹の後ろ姿を見つめていたことを……

第11話　空母の本業

とある日の浜辺。
いつも食料や艦娘が漂着する浜辺に、大樹と空母組が集まっていた。
「では始めます……発艦始め！」
「おお……」
赤城の掛け声と共に、正規空母たちが一斉に艦載機を発艦させる。
初めてその光景を目の当たりにした大樹は、思わず感嘆の声を上げた。
「放たれた艦載機が一斉に……これは壮観だな」
「あくまで偵察ですから、攻撃時の光景を見せられないのは残念ですが……」
「その光景を見るという事は、少なくとも今のように平和を謳歌できない状況ではあるのだがな」
「確かにそうかもしれませんが、それだと私たちの存在意義が……」
「まあ、軍艦の艦娘として生まれた以上、そう考えてしまうのも仕方ないとは思うが、いっそ人間として生きていくのも悪くないと思うぞ？」
「そう……かもしれませんね。その時は私たちの面倒も見てくださいね？提督」

「君たちを養うとなると、エンゲル係数がとんでもない事になりそうだな」
「あ、提督ひっど～い！」
「多門丸に言いつけますよ？」
「……頭に来ました」
　大樹の言葉に、正規空母たちが一斉にブーイングを上げる。
　やはり皆、自分達の食欲については大なり小なり気にしていたのだろう。
　それを知りつつもあえて口に出した私は、もしかしたらＳっ気があるのかもしれない。
「ははは、もちろん冗談だ。だが私自身も、つい最近までどういう生活をしていたのかうろ覚えだからな……」
「そう言えばそうでしたね」
「皆を養える余力があるのなら、全力でサポートはするつもりなのだがな……」
「ある意味、今が一番落ち着いた生活が出来ているのかもしれませんね」
「そうかもしれんな」
　穏やかな笑みを浮かべた赤城の言葉に、頷きながら同意する。
　だいぶ昔の事は覚えていても、ここで目覚める直前あたりまでの記憶が曖昧な為、最近までの生活や、会社での役職や仕事内容、貯蓄がどの位あるのか等々、分からない事

だらけなのである。
　第一、既に長期休暇では済まない日数ここに居るわけで、帰ったところで元の仕事に就けるかどうかも怪しい。
　そんな状態で多数の艦娘の面倒を見るリスクを考えると、やはり今のままの生活の方が落ち着いているのかもしれない。
「う～ん……なんにも見つからないみたい。船影どころか島影すら見当たらないみたい」
「そうか……すまないがもう少し偵察を続けてみてくれ」
「は～い」
　瑞鶴からの報告を聞き、皆に気付かれない程度に肩を落とす。
　今回のこの偵察は赤城と加賀からの提案で、ここへ漂着する前の戦闘で落とされなかった艦載機で、近辺の偵察だけをするのなら資材は必要ないという事だったので、艦載機が残っている空母達にお願いして浜辺に集まってもらったのだ。
　艦隊運営についての知識が皆無な大樹にとって目から鱗な提案であり、また今後の方針を決めるためにも必要不可欠な情報が手に入るだろうという事で、内心かなり期待していたのだ。
　コンテナなどが漂着する浜辺は決まっているので、そこから海へ向かって偵察をお願

いしたのだが、残念ながら今の所収穫はないようだ。
彼女達曰く「偵察だけなら何かが減るわけでは無い」らしいので、もう少し偵察して何も無ければ、いっそ手分けして全方向に偵察を行った方がいいかも知れない。
「……駄目ですね、何も見当たりません」
「そうか……何かあるとすればこっちの方角だとおもったのだが……。ではすまないが、今度は手分けして別方角にも偵察機を飛ばしてくれないか？」
「構いませんが……お昼ご飯の量が増えますよ？」
「む？何も減らないんじゃなかったのか？」
「艦載機を操る為にはかなりのエネルギーを消費しますので……」
「そうか……間宮達に伝えておこう」
「やりました」
したり顔で赤城とハイタッチをする加賀。
もしやこれが目的で提案した訳ではあるまいな……？
そう思わずにはいられない光景であった。
その後別方向にも偵察機を飛ばしてもらったが、やはりめぼしい情報は得られなかった
だが、収穫こそ無かったものの、「周囲には何もない」という情報が手に入っただけで

もマシだろう。
少なくとも、闇雲に長波達を出撃させずに温存しておいたのは間違いではなかったらしい。
ちなみに、昼食の件について間宮達の元へ相談に行ったところ、一緒に居た鳳翔が「発艦でそこまで消耗するはずは無い」と言っていたので赤城達に問い詰めたら、どうやら土壇場で思いついた嘘だったらしい。
その後鳳翔に盛大に叱られた空母組は、その日の昼・夜とおかずを1品減らされていた。
少し可哀想な気もするが、食糧にも限りがあるので、きっちりと反省してもらう事にする。
食べ物の恨みは恐ろしいからな。

◇

「ふーん、何も見つからなかったのかぁ」
「ああ。かなり遠くまで偵察してもらったが、島影1つ見つからなかったらしい」
「私達、かなり遠くから流されてきたのでしょうか？」

「俺もはぎいも、その辺の記憶が無いからな～」

夕食の時間。

空母組がおかずを減らされお通夜ムードになっている横で、長波・萩風・嵐の3人と食事をとっていた。

彼女達には事前に偵察を行う旨を伝えていたので、その報告も兼ねている。

「でもさ、たまたまその時に船が通って無かったっていう可能性もあるんじゃないか？」

「そう思って、赤城達には定期的に偵察機を飛ばしてもらうようお願いした」

「なるほど……。ちなみに提督、先ほどから気になっていたのですが、今日の赤城さん達暗くないですか？」

「俺も思ってた。いっつも食事時はキラキラしてんのに、なんで今日はあんなどんよりしてんだ？」

「……いろいろあったのさ、いろいろとな」

「？」

いくら反省させているからといっても、周りに知られるのは流石に可哀想かと思い、あえて原因を伏せておく。

昼に続いて2食連続のおしおきに、本人達もかなり凹んでいるようだ。

彼女達も根はいい子だと思うので、今後同じような失態は犯すまい。

「あー、まあいいか……。じゃあ目下の方針は情報待ちってことでいいのか？」
「そうだな。今までと変わらん気もするが、もし近くに航行ラインがあるのなら、近いうちに発見できるだろう」
「そうですね。気長に待ちましょう」
「しっかし、前の鎮守府に居た頃は出撃したくないと思ってたけど、いざ出撃できないとなるとそれはそれで暇なんだよなー」
「そういう意味では、君たちに窮屈な思いをさせてしまっているな……」
仕方が無いとはいえ、皆に不便な生活を強いている事に変わりはない。
これは鎮守府に艦娘が増え始めた時からの悩みだった。
そんな生活を打開する案が今日の偵察だったわけだが、収穫が無かったことで自分の予想以上にがっかりしていたようで、ネガティブな思考に陥り気味になっている。
「まあ提督が気にすることじゃないさ。そのうち何か見つかるだろ」
「そうですよ！長波さんの言う通りです！それに……」
（提督と一緒に居られるなら、今のままの生活でも……」
「んん？はぎぃ、今なんか言わなかったか？」
「ああ嵐っ!?な、なんでもないっ！」
「でも今、提督がいっ……もががが！」

「何でもないったら!!」
「……何があったのだ?」
「ん～、提督が天然ジゴロだったって話だろ?」
「……いつそんな話になった?」
「さ～てね」
下手くそな口笛を吹きながらとぼける長波にため息をつきながら、じゃれ合う萩風と嵐を眺める。
話の内容は完全に意味不明だが、萩風も怒っている訳ではないところを見るに、悪い内容ではないのだろう。
そこでふと背中側に気配を感じた大樹が後ろを振り向くと、北方棲姫が自分の食器を持って歩いていた。
普段なら気にする事ではないのだが、全体の半分ほどの食事が残ったままの食器を見て不審に思ったのだ。
地上の食べ物に痛く感銘を受けていた彼女は、いつも好き嫌いなどせずに、出された食事は全て平らげていたはずだ。
もしや彼女にも嫌いなものがあったのだろうかと様子を伺っていると、食器を返すカウンターではなく赤城達空母組のテーブルへとたどり着いた。そして一言。

「これあげる。元気出して」
そう言い残して食器をテーブルに置くと、恥ずかしそうに俯く北方棲姫。
どうやら食事の量が少ない事を気にして、自分の分をわけに来たらしい。
一瞬ぽかんとしていた赤城達だったが、北方棲姫の行動の意味が分かるや否や、目に涙を浮かべながら北方棲姫に抱き付いていた。
「ほっぽちゃ～ん、ありがとう！」
「うう、ほっぽちゃんいい子すぎるよぉ～」
「北方棲姫はわしが育てた」
「黙りなさい五航戦、あなたにこんな良い子が育てられる訳ないでしょう」
一部で火花が上がっている気もするが、なんと微笑ましい光景だろうか。
例え量は少ないとしても、自分たちの為に食事を減らしてまで分けてくれたその優しさに、例外なく心を打たれたようだ。
ふとカウンターの方を見ると、鳳翔が目尻の涙を拭っている姿が見えた。
そして何やら間宮に一言告げると、終えたはずの調理を再開し始めた。
恐らく赤城達の追加の食事を用意しているのであろう。すぐに調理を始めたところを見ると、最初から準備していたのかもしれない。
常日頃から母のように慕われている鳳翔。とりわけ空母組から特に慕われている彼

女も、なんだかんだ言って彼女達に甘いのだ。
「いや～、良い話だなぁ」
「ほんといい子すぎて……ぐすっ」
「なんだ泣いてんのか？はぎぃは相変わらず泣き虫だなぁ。なあ司令？」
「……ああ、そうだな」
「あれ、もしかして司令も泣いてんのか？」
「気のせい、という事にしておいてくれ……」
どうやら恥ずかしい所を見られてしまったようだ。
とは言え、ニヤニヤしながらこちらを茶化す嵐の目も若干潤んでいた。
彼女の名誉の為にも、あえて口にはしないが。
「でもこういう光景を見ると、提督の判断は間違いじゃなかったんだなーって思うよ」
「確かに、追い出したりしなくて良かったですよね……」
「あとは姉に会わせてあげられればな……」
「そっちも気長に待つしかねーって。もしかしたらそのうちまた漂着するかもよ？」
「……あながち否定しきれん」
そんな事を考えつつ、未だ空母組にもみくちゃにされている北方棲姫を眺める。
「ハナセッ!!」と抵抗しつつも、それが照れ隠しである事は誰の目にも明らかである。

そんな彼女が、心から笑える日が来る事を祈るばかりである。

……予感という訳ではないが、何となく、その願いは近い将来叶う気がした。